Japan Audio Society
JAS journal

平成30年3月1日発行
通巻451号
発行　日本オーディオ協会

2018
Vol.58 No.2
3

○　ネットワークオーディオ委員会活動レポート　鈴木 信司
【【連載：「試聴室探訪記」第35回】
○　～谷口とものり、魅惑のパノラマ写真の世界～
ジャズ喫茶の老舗、一ノ関「ベイシー」を訪ねて
谷口 とものり・森 芳久
【連載：Who’s Who ～オーディオのレジェンド～ 第6回】
○　輝かしきキングレコード録音史　菊田 俊雄さん（その2）
照井 和彦 JAS 事務局長
【見たい聞きたい行きたいレポート】
○　アナログレコード用ラッカー盤カッティング その3
東洋化成　照井 和彦 JAS 事務局長
【連載：Who’s Who ～オーディオのレジェンド～ 第6回】
○　オーディオ協会監修 音のリファレンスシリーズ 音源制作レポート
照井 和彦 JAS 事務局長
【JASインフォメーション】
※　平成29年度第4回（平成30年2月）理事会・運営会議報告
※　平成29年度第5回（平成30年3月）理事会・運営会議報告

一般社団法人
日本オーディオ協会

Japan Audio Society JAS journal

（通巻 451 号）

2018 Vol.58 No.2 （3 月号）

発行人：校條 亮治

一般社団法人 日本オーディオ協会

〒108-0074 東京都港区高輪 3-4-13

電話：03-3448-1206 FAX：03-3448-1207

Internet URL

http://www.jas-audio.or.jp

C O N T E N T S

・ネットワークオーディオ委員会活動レポート 鈴木 信司 P3

【連載：「試聴室探訪記」第 35 回】

・～谷口とものり、魅惑のパノラマ写真の世界～

ジャズ喫茶の老舗、一ノ関「ベイシー」を訪ねて

谷口 とものり・森 芳久 P12

【連載：Who’s Who ～オーディオのレジェンド～ 第 6 回】

・輝かしきキングレコード録音史 菊田 俊雄さん（その 2）

照井 和彦 JAS 事務局長 P16

【見たい聞きたい行きたいレポート】

・アナログレコード用ラッカー盤カッティング その 3

東洋化成 照井 和彦 JAS 事務局長 P23

・オーディオ協会監修 音のリファレンスシリーズ 音源制作レポート

照井 和彦 JAS 事務局長 P31

【JAS インフォメーション】

・平成 29 年度第 4 回（平成 30 年 2 月）理事会・運営会議報告

・平成 29 年度第 5 回（平成 30 年 3 月）理事会・運営会議報告 P51

3 月号をお届けするにあたって

急に暖かくなって一気に桜が咲き、なんとなく心がウキウキする良い季節になりました。もうお花見を楽しまれた読者もいらっしゃるのではないでしょうか。今月はまず「ネットワークオーディオ委員会活動レポート」を鈴木 委員長に寄稿いただきました。ハイレゾオーディオの普及と密接に関連してきた新しい時代の音楽媒体の軌跡をたどりながら、5 年前に発足した委員会の活動をレビューしていただきました。

連載の「試聴室探訪記」では、ジャズファンのみならずオーディオ愛好者には広く知られた一ノ関のジャズ喫茶「ベイシー」を訪れました。その独特な雰囲気をパノラマ映像でお楽しみいただければと思います。

もう一つの連載の「オーディオのレジェンド」では、先号に引き続きキングレコードの菊田 俊雄氏のインタビューを照井 事務局長にまとめていただきました。

「見たい聴きたい行きたいレポート」は、「アナログレコード用ラッカー盤カッティング」の 3 回目で、CD 時代にもアナログレコードの制作をたゆまず続けてきた東洋化成を訪問しました。また、1 月にビクター青山スタジオで行われた、オーディオ協会監修のハイレゾ音源「音のリファレンスシリーズ」の制作・収録の様子を照井 事務局長がレポートしました。

最後に平成 29 年度第 4 回、5 回の理事会・運営会議の報告を JAS インフォメーションとして掲載いたします。

☆☆☆ 編集委員 ☆☆☆

（委員長）君塚 雅憲（国立科学博物館）

（委員）穴澤 健明・稲生 眞（（株）永田音響設計）・遠藤 真（NTT エレクトロニクス（株））

大久保 洋幸（NHK 放送技術研究所）・高松 重治（CS ポート（株））・春井 正徳（パナソニック（株））・森 芳久

八重口 能孝（オンキヨー&パイオニアマーケティング（株））・山内 慎一（（株）ディーアンドエムホールディングス）

山﨑 芳男（早稲田大学）

ネットワークオーディオ委員会活動レポート

オンキヨー＆パイオニアテクノロジー株式会社

鈴木 信司

はじめに

日本オーディオ協会には会員企業をメンバーとする委員会が複数あり、オーディオ技術検討、イベント活動などそれぞれのテリトリーで活動を続けています。ネットワークオーディオ委員会もその一つで、2013 年に 2 回の準備委員会を経て発足以降、ネットワーク技術を活用したオーディオの楽しみ方の発信と諸課題解決をテーマとして活動してきました。発足より約 5 年を経過したのを機に、活動状況と今後の展望についてレポートします。

発足の主旨

データファイルを音源とする音楽鑑賞スタイルはすでに 1990 年代から一部の関心を集めていましたが、2000 年代に入ってからの 10 年余りの間に、高音質なフォーマットを用いた音源やその配信を行うサイトが次々登場し、新しい再生手段として注目を浴びるようになってきました。ファイル音源はネットワーク環境とも親和性が高く、従来のパッケージメディア中心の鑑賞スタイルとは異なる楽しみ方が可能です。しかし、PC 環境、ネットワーク環境の音楽再生系への導入方法はまだ万人に周知されているとは言えず、普及に向け、魅力を伝える啓発活動と用語整理なども含めた課題解決が求められていました。本委員会はそのニーズに応える活動を行うことを目的として発足しました。発足にあたり、以下のような活動方針を定めました。

①. 委員会名称には『ネットワークオーディオ』を冠するものの、USB オーディオや PC オーディオなど、様々な手法と名称で呼ばれていたファイル音源鑑賞スタイルをすべてスコープとする。
②. そのような事業に従事しているオーディオ協会会員企業に広く参加を呼び掛ける。
③. 協会主催の展示会や協会開設のホームページなどを通じた啓発活動と、お客様が直面する可能性のある様々な課題の解決に向けた討議/活動を主たる活動の両輪とする。
④. 活動にあたっては JEITA ネットワークオーディオ専門委員会と密接に連携し、双方の組織の特性を活かした協業を図る。

2 回にわたり準備検討を行った後、2013 年 8 月 6 日に、当時はネットワークオーディオ検討部会技術 WG という名称で活動を開始しました。

活動の軌跡

【情報発信】

発足当時の活動はネットワークオーディオの普及促進に軸足を置いており、イベント活動と協会ホームページを介した情報発信を活動の中心にしていました。

特に、音展には 2013 年より参画しており、今日に至るまで委員会活動の中で大きなウエイトを占めています。

委員会として最初の出展となった 2013 年の音展では、9 社の音響機器メーカー、1 社のネットワーク機器メーカー、3 社の配信サービス会社が参画し、PC/NAS/内蔵メモリーなどさまざまな場所に格納された音源を IP ネットワーク/USB/Bluetooth といった様々なインターフェースを介して伝送/再生する製品群をデモ展示して楽しみ方のバリエーションを紹介するとともに、配信サイトからの音源入手方法も実演し、ネットワークオーディオを様々な観点から体験していただくコーナーとしました。

図-1：2013 年　音展ネットワークオーディオコーナー

また、同じ年、ネットワークオーディオと銘打ったホームページを開設しました、ネットワークオーディオの体験レポート、イベント情報、メーカーリンク、音源新譜紹介といった記事を掲載し、ネットワークオーディオへの興味の喚起を図る内容としました。ホームページによる発信は後述する課題解決の試みにおいて重要な位置を占めており、発信ツールとして現在も活用しています。以下は開設前の試作画面です。なお、このページは独立のドメイン名をもってスタートしましたが、協会ホームページのリニューアルに合わせ合体、現在はオーディオ協会ホームページ（http://www.jas-audio.or.jp/）の中に存在します。

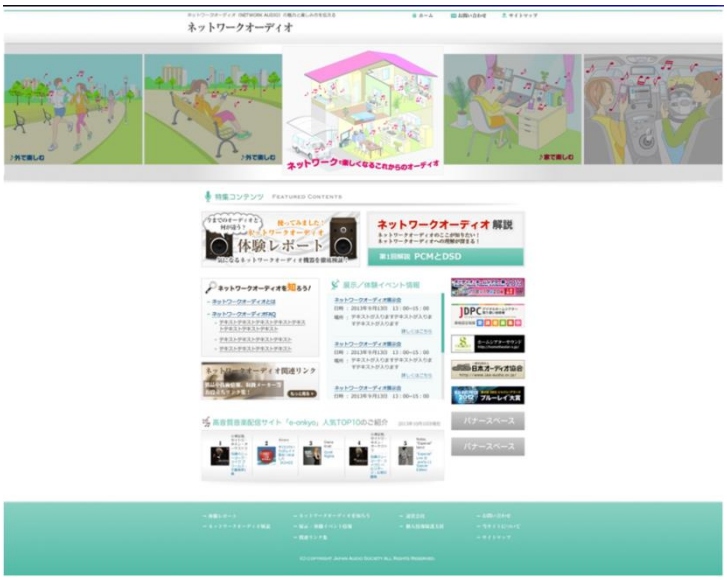


図-2：構想段階の『ネットワークオーディオ』ポータルページの画面イメージ

2014 年に入り、JEITA が『ハイレゾオーディオと呼称する場合 CD スペックを超えるディジタルオーディオであることが望ましい』という主旨の公告を発表し、6 月には日本オーディオ協会がハイレゾロゴ制定の発表を行いました。ハイレゾ音源は CD を超える次世代オーディオの核として一躍期待を集めることとなりましたが、配信による販売やファイル管理といった音源の販売/所有方法がネットワークオーディオとは非常に親和性が高い一方、広く普及するにはその扱い方の周知が喫緊の課題となっていました。当初間口の広い活動方針で発足した当委員会ですが、上記のような課題に対する取り組みを優先的に行うため、以降ハイレゾに軸足を置いたテーマを中心に活動することとしました。

音展出展内容にもそれは反映されており、2014 年には『ハイレゾで楽しむネットワークオーディオ』と銘打ち、ハイレゾ製品の使用シーンをビジュアルに紹介する展示を行いました。

リビングシーン　　書斎シーン　　プライベートシーン

図-3：2014 年音展ネットワークオーディオコーナーでのシーン展示

2015 年の音展では、後述するセミナー開催に加えアトリウムでの製品展示も行い、ハイレゾ製品の広がりをアピールしました。

図-4　2015 年音展での製品展示

【課題解決】

イベント活動等様々な発信を行う過程で、『ハイレゾの良さを感じ取れるような比較試聴を体験したい』という要望が多くのお客様から寄せられ、この要望に応えることが重要な課題となりました。これに対して当委員会が出した回答が、2015 年の音展と 2016 年の音のサロン&カンファレンスの 2 回にわたり開催したセミナーです。

この 2 回のセミナーでは、比較試聴用に独自の音源を作成し、それをセミナーの場で試聴いただくことにより、ハイレゾの良さを実際に体験していただく内容としました。

2015 年のセミナーでは、全く同じ録音系を用いて 192kHz/24bit、192kHz/16bit、44.1kHz/24bit、44.1kHz/16bit の各パラメータで同時収録、記録パラメータだけが違う音源を同一再生環境で再生することにより、違いが音質にどう影響するかを体験していただきました。

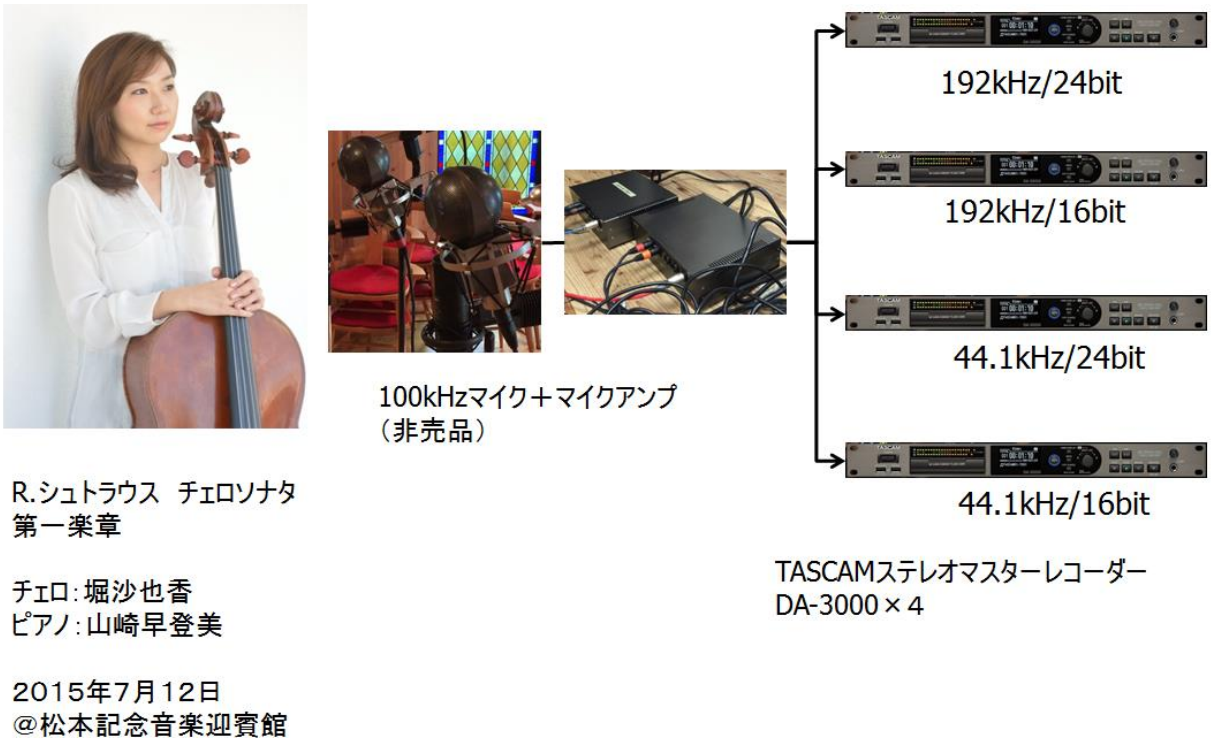


図-5：2015 年ハイレゾ試聴セミナー　収録緒元

2016 年の音のサロン&カンファレンスでは、今度はハイレゾ同士の聞き比べとして、前回同様に同一の録音系/再生系を用いた、DSD、WAV、FLAC の違いを体験いただきました。前年のハイレゾ/非ハイレゾの実力差の試聴とは異なり、ハイレゾ同士の特徴の違いを楽しんでいただく主旨の展示とし、より深くハイレゾを理解いただくことをめざしました。

曲目

バロックフルート　：砂山佳美
チェンバロ　　：石川陽子
2016年9月17日
@松本記念音楽迎賓館

100kHzマイク＋マイクアンプ

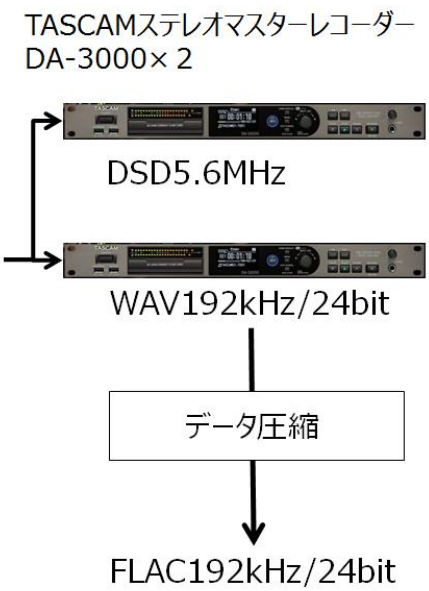


図-6　2016 年ハイレゾ試聴セミナー　収録緒元

どちらのセミナーも、フォーマットの違いからくる音質の違いを純粋な状態で体験いただくために、収録はあえて無加工の一発録りとし、素材そのままの状態での試聴実験としました。ハイレゾのポテンシャルについて狙い通りにお伝えすることができたと評価いただいています。

なお、このような活動は他団体でも注目され、要請に応じ、ハイレゾをキーワードとした出張セミナーも行っています。

一方、発足時点より認識していた課題として、ネットワークオーディオ特有の機器の使いこなしの問題がありました。ネットワーク機器や PC 周辺機器を活用することにより、ネットワークオーディオ、そしてハイレゾを便利に楽しむことができますが、反面これら機器が従来のオーディオ機器とは異なる出自であることがネットワークオーディオやハイレゾに親しむにあたっての最初のハードルであるととらえ、この課題を解決するために、本委員会ではいくつかの情報提供記事を作成、ホームページを用いて継続的に発信してきました。

その一つが『ネットワークオーディオ導入ガイド』です。この記事では、音源の入手方法と購入候補のプレイヤーのタイプを選択することにより、それぞれのケースに即したコンテンツ入手方法、必要な機材の紹介、接続方法、設定方法の概要が紹介される仕様となっています。他の紹介記事とは異なり詳細な説明には踏み込まない代わりに、最小限の選択肢で所望の情報を得られるように工夫することにより、悩みなく導入を進めていただける内容とすることを目指しました。

図-7　ネットワークオーディオ導入ガイド

また、ネットワークオーディオに登場する基本用語を解説する『用語集』、ネットワークオーディオやハイレゾの楽しみ方の実例を紹介する『商品体験レポート』も作成、ネットワークオーディオにまつわる様々なお客様の悩みに応えることを目指しています。

【ハイレゾ】

日本オーディオ協会ではハイレゾロゴプログラム立ち上げにあたって様々な課題が発生することを想定、対応する体制を整えてきました。当委員会の委員はネットワークオーディオという切り口で集まったメンバーですが、ハイレゾに関しても有識者集団であることから、全員がロゴプログラム開始後発足したハイレゾステアリングコミッティーの諮問機関であるハイレゾ定義 WG にも所属、ハイレゾ諸課題解決に向けたより詳細な審議も行ってきました。主に、ハイレゾロゴプログラム発足時には想定していなかった新たな製品形態についてのロゴ付与ルールについて検討を行いました。この体制は 2015 年末に解消され、翌年より、より専門的に審議を行うハイレゾ推進会議にミッションが引き継がれています。

【最近の活動】

現在、当委員会では『ネットワークオーディオ年表』を作成しています。これは、ファイル音源発祥の時代から今日に至る、音源、フォーマット、配信技術、製品、インフラなど様々な観点での歴史を一望にとらえる内容で、各年代の時代の空気を切り取ると同時にその進化を追えるような内容となっています。近日中に日本オーディオ協会のホームページで公開予定です。ご期待

ください。

今後の展望

当委員会には現在 17 社が参加しており、発足時点の 10 社から大きな広がりを見せています。

発足時参加企業	現参加企業
(株)JVC ケンウッド	NEC パーソナルコンピュータ(株)
アキュフェーズ(株)	(株)アイ・オー・データ機器
オンキヨー(株)	アキュフェーズ(株)
(株)クリプトン	(株)エミライ
シャープ(株)	オンキヨー(株)
ソニー(株)	(株)クリプトン
ティアック(株)	ソニー(株)
(株)ディーアンドエムホールディングス	(株)ソニー・ミュージック・エンタテインメント
パイオニア(株)	ティアック(株)
パナソニック(株)	(株)ディーアンドエムホールディングス
	(株)デジオン
	東芝映像ソリューション(株)
	パナソニック(株)
	フォスター電機(株)フォステクスカンパニー
	メルコシンクレッツ(株)
	ヤマハ(株)
	ラディウス(株)

図-8　参加企業一覧（50 音順）

活動開始から 5 年の間に、ファイル音源を扱うことのできるオーディオ機器、またハイレゾロゴを取得した機器が続々発表され、すでに数百ものハイレゾロゴ取得製品が世に送り出されており、“ハイレゾ”という用語も浸透しつつあります。しかしながら、依然として当初より課題としてとらえていた導入に対するハードルは残っており、お客様の悩みを払しょくするための課題解決の取り組みは継続して必要ととらえています。

一方で、活動開始からの 5 年の間に、ネットワークオーディオをめぐる環境には変革の兆しが見えており、新たな潮流への対応も必要になってきました。

ひとつの潮流として、ネットワーク技術標準化の立役者だった 1394TA（iLink や FireWire という名称でも呼ばれた IEEE1394 技術の標準化を推進する団体)や DLNA（DLNA ガイドラインの作成、認証を通じて IP ベースのホームネットワークの標準化を推進する団体）が相次いでアライアンスとしての活動を停止する動きがありました。特に DLNA はネットワークオーディオ製品同士の互換性に関する重要な技術ですが、アライアンス発足時に比べ各社とも技術力が向上

し、認証という手続きを経ずとも各メーカーの品質管理により相互接続性が保たれるレベルまで技術が成熟してきたことが解散の一因とされています。この流れが意味するのは、単に DLNA など対応する規格/方式名を謳い互換性が確保されていればよかった時代から、確保された互換性をもとにもっときめ細かい使い方/利便性をお客様に提案することの重要性が増してきたということだととらえています。

もう一つの潮流のキーワードは“ストリーミング”です。光インターネット回線の普及、4G による高速モバイル回線、さらに 11ac への Wi-Fi の進化など、高速ネットワーク環境の整備が進んだことにより、音楽データの安定的なストリーミング配信が可能になったことが原動力になっています。この流れに乗り、2015 年ごろより海外大手ストリーミング配信サービスが相次いで日本上陸を果たしました。インターネットラジオという名称でも呼ばれたかつてのサービスとは一線を画し、有料サービスに契約することにより膨大なライブラリの中から好きな曲/アルバムを選んで定額聴き放題で楽しめることがこれらのサービスの特徴です。また、ハイレゾでストリーミング配信するサービスも出現、音質改善の動きも出てきています。（そのうち 1 社にはオーディオ協会よりハイレゾロゴ使用が許諾されています。残念ながら日本未上陸）。ストリーミング配信の真価を伝えると同時に、発生しうる新たな課題について検討することが必要ととらえています。

このようにネットワークオーディオを取り巻く環境が刻々と変化する中で、当委員会も都度の進化が求められています。現在課題を整理しつつあり、前述した年表もその過程で潮流を考察する中で作成したものです。方針が定まり次第、新たな姿をご紹介いたします。引き続き当委員会の活動に対しご支援ご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

■筆者プロフィール：　鈴木 信司（すずき しんじ）

1982 年パイオニア株式会社入社。オーディオ製品およびビジュアル製品の開発/設計、ネットワーク技術開発等に従事。現在オンキヨー＆パイオニアテクノロジー株式会社ハードウェア技術部。日本オーディオ協会ネットワークオーディオ委員会委員長、ハイレゾ推進会議委員。JEITA オーディオ・ビジュアル事業委員会委員、ネットワークオーディオ専門委員会委員。

【連載：「試聴室探訪記」第 35 回】

～谷口とものり、魅惑のパノラマ写真の世界～

ジャズ喫茶の老舗、一ノ関「ベイシー」を訪ねて

フォトグラファー 谷口 とものり・編集委員 森 芳久

レストランの評価として有名なミシュランの星の数、一つ星から三つ星まで三ランクあるのはご存じの通りです。その星の数は、★★★（三つ星）はそのために訪れる価値のある卓越した料理を提供する店、★★（二つ星）は遠回りしてでも訪れる価値のある素晴らしい料理の店、★(一つ星)はそのカテゴリーで特に美味しい料理を提供する店、と定義されています。

今回訪問した一ノ関の老舗ジャズ喫茶「ベイシー」はこの星で評価するならば間違いなく★★★の評価となるでしょう。事実、一ノ関を訪れた方はもちろん、「ベイシー」を訪れるためだけに一ノ関に行く人が少なくありません。それは海外からのミュージシャンもまた同じです。彼らもまた、東京や各地の公演など忙しいスケジュールの合間を縫って、東北のベーシーを訪れているのです。それはこの店で提供される“料理”に相当する“音響”が卓越していることはもちろん、主人つまり“オーナーシェフ”菅原正二氏の人を惹きつける魅力と言えるでしょう。

菅原氏は、根っからのジャズファンであるのはもちろんドラマーとしてもその道を究め、国内外の多くの演奏家達と親密な交友関係を持つこの道の達人です。また、「ステレオサウンド」誌に 1994 年から長期連載中のエッセイ「聴く鏡」の愛読者も多く、既に二冊の単行本として同誌より発行されています。そこには菅原氏のジャズまたオーディオや趣味にかける哲学と情熱が洒脱な文章で語られています。

筆者もこの「ベイシー」には何度も訪れ、その昔 CS テレビ番組で「ベイシー」と菅原氏をご紹介したこともありました。そんなご縁で、このコーナーでも JAS ジャーナル読者の皆さまに、谷口とものりさんのパノ

ラマ映像でご紹介できる機会を狙っていました。
今回、菅原氏のご好意でその機会を得ることができ、「ベイシー」を皆さまにご紹介できることとても嬉しく思っております。

さて、まずは菅原氏の経歴とベイシーの歴史を簡単にご紹介いたしましょう。
1942 年岩手県一ノ関で生を受け、高校時代にはブラスバンドでトランペットに興じその才能を開花させていた菅原少年は、進学は早稲田大学と決めていました。そこには多くの名ジャズプレーヤーを排出してきた、ハイソサエティ・オーケストラがあるからでした。「勉学より兎に角ジャズを演奏したい」この思いで 3 年間の浪人生活をしてまでも早稲田を目指したのです。もちろん、この情熱と努力で晴れて早稲田の門をくぐることになります。菅原氏と同じ思いで早稲田に入学したジャズファンは他にもいます。タモリもまた菅原氏の一級下として入学しているのです。
しかし、19 歳の時に肺を病んだ菅原氏は後にトランペッターを断念、ドラマーとして道を歩むことになります。その大きな切っ掛けとなったのは 1963 年 5 月にカウント・ベイシー楽団が来日したときのことです。菅原氏はその公演を聴きに行きソニー・ペインのドラムを聴いて「これだ」と思ったのです。そしてドラマーになることを決意したのでした。そこで才能を開花させた氏はバンドリーダーとして楽団を率いて初のアメリカ公演を成功させます。メンバーにはベーシストで作曲家の鈴木良雄などの錚々たるメンバーが加わっていました。

菅原氏愛用のドラムセット。舞台の前にセットされいつでも演奏可能

その後、チャーリー石黒に呼ばれ東京パンチョスと演奏したこともあり、そのキャリアにも磨きがかかっていきました。だが、菅原氏は 1970 年ドラマーを廃業することを決意したのでした。そして「やることが無いからジャズ喫茶でもやるか」と思い立ちジャズ喫茶「ベイシー」を開業します。これもまた菅原美学なのでしょう。

以来「ベイシー」はその店主の奏でる“音響”と“個性”を売り物として半世紀近くを経た今日までその魅力を維持し続けています。

常連客の寄付による椅子の革の張り替え
（真鍮プレートに贔屓ミュージシャンと寄付者の名前が刻印されている）

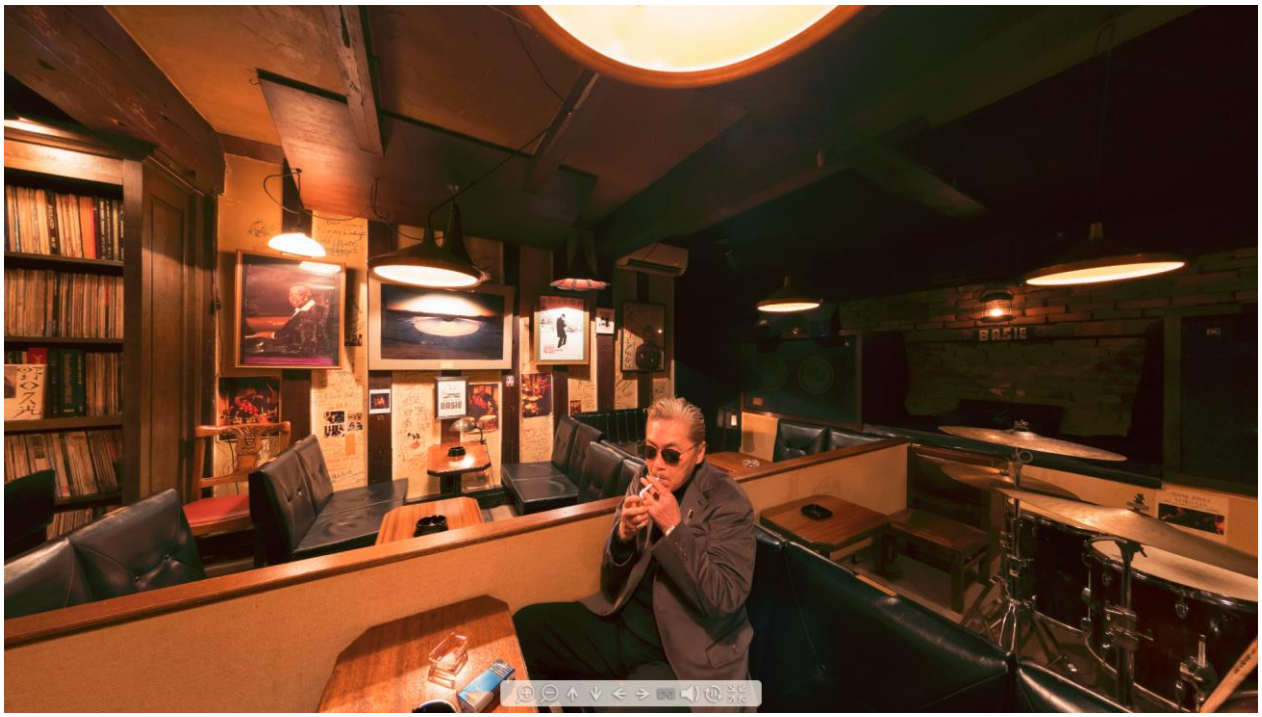
スピーカーやアンプなどは JBL で固められ、プログラムソースはもちろん LP 盤のみです。カートリッジは一貫して ShureV-15 type III がメインであるのも店主の拘りです。そして「ベイシー」が誇るそのプログラムソースの量も半端ではありません。「全部で何枚位あるのですか？」との質問に、「枚数は判りません。しかし野口久光先生から頂いた遺産のレコードはその運搬業者からの伝票に 20 トンと記載されてましたのでトータルでは 25 トン位はありますよ」との応えが返ってきました。

それでは、今回もまた谷口マジックによる魅惑の映像の世界を存分にお楽しみください。部屋を巡りながら、要所要所をズームアップしてご覧頂ければ、店内に何気なく置かれている物、そしてディスプレイされている物など、菅原氏の人生と趣味が浮かび上がってきます。著名演奏家

たちのサインの数々、そして菅原氏が愛用していたトランペット King Super 20 なども発見できるでしょう。

菅原氏は開店前に何時も自分の指定席である椅子に舞台に背を向けて座り、まずはタバコに火をゆっくりと付け一服します。

さあ、今日も「ベイシー」の開店です。



パノラマ画像の操作説明

■ パノラマ写真は、 ここか、はじめのページ画像をクリックしてご覧ください。
（ローディングに若干時間がかる場合あります。）

■ マウス操作で、画面を上下・左右 360 360 度、自在に回転してご覧いただけます。

■ 画面下にある操作ボタンで次の操作ができます。

＋ 画面のズームイン

－ 画面のズームアウ ト

← 画面の左移動

→ 画面の右移動

↑ 画面の上方向へ移動 画面の上方向へ移動

↓ 画面の下方向へ移動 画面の下方向へ移動

【連載：Who's Who ～オーディオのレジェンド～ 第 6 回】

輝かしきキングレコード録音史　菊田 俊雄さん（その 2）

聴き手：JAS 照井和彦

前回その 1 ではキングレコード部が新設された 1931 年（昭和 6 年）から、尾久に竣工した工場、音羽に建てた録音スタジオ、そしてテレフンケンから来た技師ゼーランド氏からの技術指導などのお話を伺いました。 輝かしきキングレコード録音史。引き続き菊田 俊雄氏からお話を伺ってまいります。

戦争の影響

戦争はレコード会社の社名変更という事態をもたらし、1940 年代に入って日本コロムビアは日蓄工業、ビクターは日本音響、ポリドールは大東亜工業、キングは富士音盤などと、敵性語が書き換えられました。

戦後の復興は道のり遠く、為替レートは 1 ドル 360 円で国はドルへの交換制限を行うなどしており、輸入品はアメ横（上野アメヤ横丁）あたりに米軍から放出されたものを扱う店があるくらいのもので、業務用途でも機材の輸入は大変難しく、唯一の例外は放送局など公共に関するものだけという時代がしばらく続きます。

戦争終結後、晴れて社名を元に戻したレコード各社、日本コロムビア、日本ビクター、キング、ポリドール、テイチク（5 社）は録音から生産·販売網まで一貫して自社で賄っており、独立系のスタジオ運用会社などは存在しない時代です。貴重なスタジオ設備も技術も戦前のままで、レコードはシェラックを主原料とした 毎分 78 回転の SP 盤の時代でした。ビニール盤の LP や EP の新時代の波がそろそろ海外からやってきている頃ですが、実際に日本で LP レコードに着手され始めたのは 1951 年（昭和 26 年）からで、ビニール素材（レジン）の国産化は 1955 年（昭和 30 年）のことになります。

JAS：テープレコーダーが登場する時代ですね？

「1951 年に民間ラジオ局が営業を開始して放送（AM）番組も賑やかになります。この当時すでに放送を開始している NHK では生番組以外の録音放送には円盤式録音機（アセテート盤録音／ラッカーのこと）を主に使用していました。レコード録音と同じ円盤式の録音機は誰でもが取り扱えるものではなく技術力の必要な機器でしたが、レコード録音と大きく違う点は盤へのカッティングが内側から始まり外周へ向かって行くことで、この動きは CD と同じですね。

追いかける形で新スタートした民放では、誰でもが取り扱える当時新製品であったテープレコーダー（マグネコーダー製が多かった）とテープ（Scotch 111Ａ／3M）をアメリカから特別枠で輸入して使用開始します。余談としてキングはこのマグネコーダーを民放から借りて映画配給会社の試写室へ出向いて行き、ハリウッド映画のサウンドトラック（光学式録音）の主題曲をテープに落として、レコード化したこともありました。サウンドトラック盤レコードの始まりですね。その後『第三の男』、『禁じられた遊び』、『鉄道員』、など多くのフィルムからサウンドトラック盤を作りましたが、印象に残っているのは鉄道員のエンディングで子供のセリフ一声がどうしても切れずに残してあったのが後で逆に効果的になったのを覚えています。」

Scotch 111A

JAS：国産のテープレコーダーはなかったのですか？

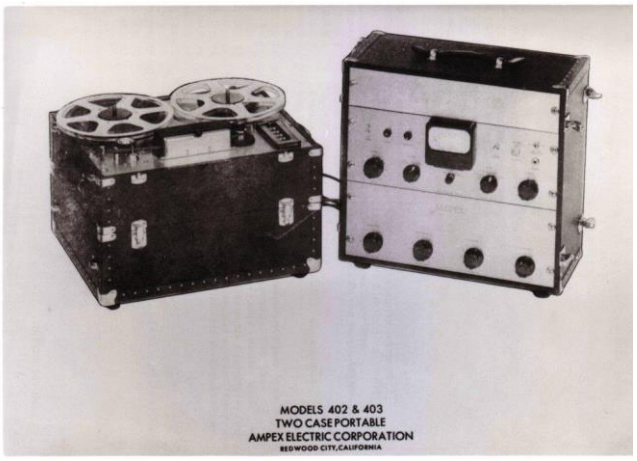
「しばらくして東京通信工業(現ソニー株式会社)がマグネコーダーと同じコンセプトのテープレコーダーKP-3 を製造開始し、民放ではこの機械を持ってあちこちと取材を行っていました。キングでも放送局への番組提供用に導入しましたが、本番のレコーディングには使っていませんでした。この頃の国産品テープは感度が低く(約－10dB)業務用は Scotch 111Ａが標準指定品でした。」

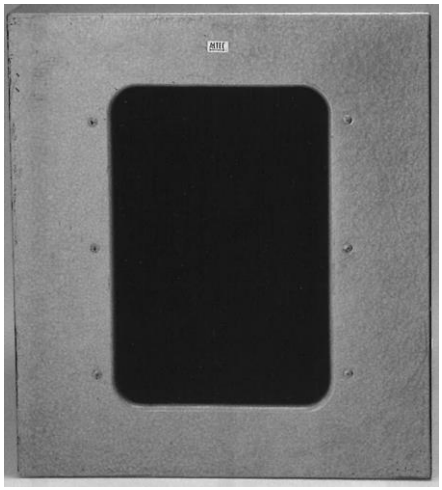
東京通信工業 KP-3

JAS：キャピトルと技術提携したそうですね。

「キャピトルと原盤契約を結んだのが 1951 年で、キャピトルの元技術者 ワーレン・バーケンヘッド氏の指導のもとで、米国式最新の録音技術や機材をキングが導入したのは 1953 年のことです。

写真にあるアンペックス･テープレコーダーA-400 型を 2 台、アルテック 15 インチウーハーに同軸ツイーターの 604-B （通称銀箱スピーカー)、同社製のパワーアンプ、アメリカン･マイク(可変指向性)、ピッカリング･カートリッジ(SP/LP ターンオーバー式)と専用アームのついたプレーヤー（ダイヤ針の珍しい時代）と、同社製の各社再生特性(RIAA 特性決定前)切替付きのプリアンプ、オーディオ発振器、IM 歪測定器、 初めて見たキャノン･コネクター付きのケーブル類、プラスチック製でなく 10.5 インチ金属リールの磁気テープ Scotch 111A、7／32 インチ幅のスプライシングテープ、さらに調整用の基準テープ（アンペックス社製）など、珍しいものばかりでしたね。」





アメリカン・マイクとアルテック銀箱スピーカー

JAS：海外（キャピトル）からマスターテープは届かなかったですか？

「当時の海外レーベルの盤は原産国でレコード原盤用の金属マザーから複製した金属原盤を日本へ送り、日本ではそれを元にスタンパーを作ってプレスするのが普通でした。日本ではマスターテープの音を盤へ移すのをカッティングと言っていましたが、アメリカではこの作業をマスタリングといって大事な音創り工程の一つになっていることはずっと後になって判りました。

1953 年までレコード盤を通して通常の再生装置で聴いていたキャピトルのサウンド･イメージは、バーケンヘッド氏がコピーして持参した原盤用のサブマスターテープを、アルテック 604-B の 15”スピーカーで再生した音を聴いて初めて再認識させられました。レスポールのギター演奏やスタンケントン、レイアンソニー、ケイスターなどでしたが、音楽の良さどころかサウンドの

魅力に圧倒されて『世の中にこんないい音があるのか』と腰を抜かさんばかりに驚いたのを覚えています。エンジニアの私でさえも技術で語れる表現ではなく、それは音楽が一塊になって届く体感そのものでした。それまでのキングのモニタースピーカーはテレフンケンの 12 インチユニットのもので、静かに耳を澄まして聴く感じで、モニタースピーカーはどこへ行ってもソフトに鳴っているのが当たり前でしたから、とにかくキャピトルから導入された機器類は異次元の音に聴こえました。」

JAS：それはカルチャーショックでしたね。

「これらの機材は初めて見るものばかり。日本ではケーブルのコネクターはタジミの 3P（当時の放送規格／BTS 規格）で接触不良が多くて困っていましたが、キャノン・コネクターでは全く接触不良は起きない。テープは毎秒 7.5 インチ（19 センチメートル）走行が常識と思っていたのに 15 インチ（38 センチメートル）で録らないとダメという。なんてもったいない！と思いましたよ。録音開始したらマスターナンバーとテイクナンバーをトークバックマイクで唱えて録音せよ！と言われ、あー恥ずかしい！それまでこんな確認作業を行ったことが無かったので、やり損うとスタジオの馴染みの楽団員に冷やかされました。録音が終わったら、OK 部分だけテープを切りとり別のマスターリールへつなぎ込め！ の指示で、これも もったいない！ 切らないでコピーでは駄目なのかとか？ 更にプロテクションとしてマスターテープからコピーしたテープを作り、別の場所へ保管せよ！ 流石にこれはやった顔して後でこっそり消していました。何しろテープは 3～4 本で我々の給料を超える貴重品でしたからね。」

JAS：いろいろな経験ができましたね。

「テープレコーダーはメーカーで調整した状態で使うものと思っていたら全く違っていて、使用テープのロットごとに最良の状態に合わせる感じでした。そのための測定器類も持って来ていてヘッドアジマスやバイアス、周波数特性などを正確に合わせ込みました。

特筆すべきなのは日本では普及しなかった IM 計(混変調歪測定)を使って適正バイアスを合わせる方法です。今でも私はアナログテープの調整にはベストだと思っている方法でした。現在の IEC(国際規格) では第 3 高調波歪が最小になる点が最適バイアスとしていて、10 kHz 等の高域でのオーバーバイアスで、例えば−3dB 下がった所を適正バイアスとしてもよいとある。通常の全高調波歪(THD)計ではテープノイズが加わって測定不能だから苦肉の策として第 3 高調波としていますが、当時のアナログ測定器で第 3 高調波を正確に測るのは大変面倒ですから、実務では 10kHz 位の高域周波数で代用していますが、機種やテープで値が若干異なるためスチューダーの取説などにはテープの種類による値の違いが表記されています。これが 7kHz と 50Hz を

ミックスした信号を用いる簡単な IM 計で測定すると、機種等には無関係で直ぐにバイアスのベスト点が調整できて能率的であり正確に合わせることができるわけです。そのためにテープ独特の濁り感が全くなく透明感のある記録ができました。キャピトルが利用していた混変調歪で測定する方法はテープノイズに影響されない極めて合理的な方法だったと今でも感心しています。

その他 テープのヘッドカバー閉めるのに途中で手を放してガチャンと音を立てると酷く怒られました。『そっと蓋を閉めないとアジマスが狂ってしまう』とおよそアメリカ人らしくない細かい気遣いもあったのです。」

JAS：音創りを教えてください。

「まずエコールームが必要ということで部屋探しをした結果、スタジオの屋上に昔の送風機室があって、そこをエコールームにすることになった。取りあえず使っていない PA 用の安物のマイクとスピーカーを置いたが、私はそんな物ではクオリティーの低い、ろくな音がしないと予想していました。ところが意外にいい響きになっていて驚いたのがその時の正直な感想でした。早速、レコード録音の本番で歌声や楽器に使ったところ、これが素晴らしい結果に。その後この業界で話題になってしまい、ある会社ではディレクターが録音課長に聴かせたら『これは日本の録音でないと』言われたとか。その頃は放送局でドラマの音響効果に非常階段の響きを使っていた程度で、音楽収録では初めての挑戦でした。放送局などからも見学者が訪れバラック･エコールームを見て『音羽の奇跡だ』とも言われたこともありましたよ。それにしても日本初のエコールームはお粗末なものでした。」

JAS：わくわくするお話ですね。

「それまでの録音は、楽器群を狙ってマイクロホンを少し遠くに置いて全体をバランスよく収音する方法でしたが、バイオリンも含め楽器個々の鼻先にマイクを置き、生々しい音を収音して、残響付加で音色を調節する方法を教えられたのです。これは日本には無かった収音方法で、実にクリアーな音に聴こえました。

更に、江利チエミがポピュラー音楽(Side by side）を録音して終わったとき、突然バーケンヘッド氏から一人二重唱の提案があ

って、急遽ダビングによってマスターが作られ、これも日本初の一人二重唱の録音となりました。
　戦前の装置や限られた機材で録音せざるを得ない各社と、キングのように最新の機器に恵まれ直接指導を受けた結果は歴然。最新式音創りの大きな特徴は収音方法にあったのです。彼の功績はその後のキングに与えた方向性や考え方に大きな影響をもたらしたことは確かです。」

JAS：録音方法や機材についても教えてください。

「1950 年代はレコードの変革期で 50 年代の前半は磁気録音システムの出現で、テープ録音時代になってレコード録音の原盤は金属原盤保管からマスターテープ中心へと大きく変わっていきましたが、50 年代の後半にはステレオ録音という新しい技術革新が始まろうとしていました。
　キングではスタジオ設備をポータブル中心のバーケンヘッド方式から据置型のモノラル録音設備へ、エコー室も EMT 鉄板式に切替えた 55 年を過ぎた頃、世界では双頭ヘッドの 2 本溝のステレオレコードとか、VL 方式のステレオなど、話題が高まってきました。
　当時社内的に制作部門は３部署あって純邦楽や三橋美智也、春日八郎などを担当する邦楽部門、童謡などの教養部門、外国原盤や外国曲を扱う洋楽部門があって、江利チエミやザ･ピーナッツなどはこの洋楽部が担当していましたが、ポピュラー音楽の人気上昇で録音数が増えたため洋楽担当者は外に出ざるを得なくなり、平日の昼間空いている大ホールを利用して非公開で録音することになりました（貸しスタジオのない時代）。私はその洋楽部関係の録音を多く担当していましたので、当時モノラルの時代でしたが将来的に可搬できる最新式の機材を揃えるこことしました。」

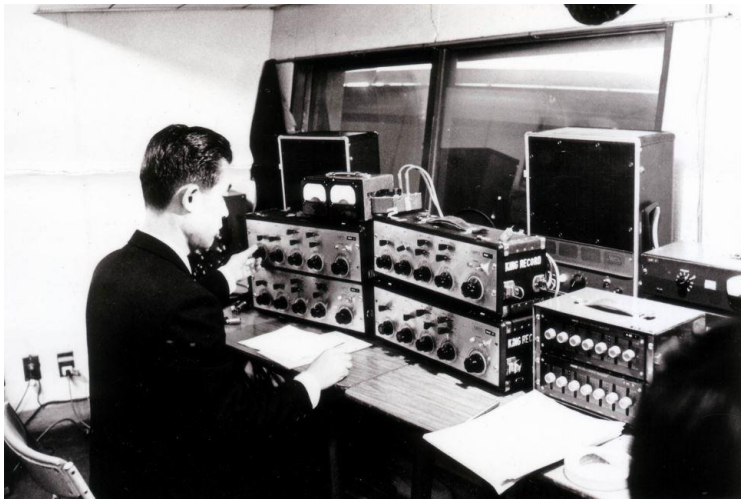
音羽に完成した二つ目のスタジオ（スタジオ 1）

JAS：どんな機材が集まったのですか？

「19 インチサイズの AMPEX MX-35 Stereo Mixer を 6 台（通常 4 台カスケードで 16 Mic-IN の他にエコー回線用等に 2 台）、AMPEX 351　Stereo Tape Recorder を 2 台、AMPEX のアンプ内蔵のモニタースピーカー（ユニットは JBL）やエコーマシン、ノイマン U47、RCA-77D、ALTEC 639B、などのマイクを 20 本位とスタンドまで一式をトラックに積んでジプシーのようにホールからホールへと転々と移動する毎日がありました。

ホールにはお客は居ないので舞台いっぱいに楽器群が拡がり、歌も同時に録音するため歌手は客席のフロアーに降りて楽器のかぶりの少ない場所で歌ったりしていて、通常の舞台演奏とは全く違う配置での収音方法でした。また、エコーマシンだけでは不十分なため客用のトイレもエコールーム代わりに使ってスピーカーやマイクを置いて長いケーブルで録音室とつなぎました。そのために洋楽系のマスターテープは邦楽系よりかなり早い時期にステレオ化への準備ができていたというメリットがありました。

全ての設備がステレオであることは当然として、マルチチャンネル対応（当初 8ch／16ch）に切替わったのは 1964 年に音羽通りに第 1、第 2 の音楽録音スタジオを持った新ビルが出来てからで、その頃になるとレコード生産の半分がステレオ盤という時代に変わっていました。」



ホール録音の機材

次号に続く

菊田俊雄氏プロフィール

1949 年 キング音響(株)〔現 キングレコード〕録音課へ入社、録音部長を経て音響技術専門学校〔現音響芸術専門学校〕へ転職、教務部長から現在は理事で同校顧問。キングレコード在職中は クラシックからポピュラー音楽、演歌や純邦楽まで約 12,000 曲の録音に携わり、その間日本初の本格的なマルチチャンネル録音やコンピュータ制御のミキシング装置の導入を行う。またレコードの音質改善のために半速カッティングシステムなども積極的に構築した。

一方、レコード協会の技術部会長、AES 日本支部長(1990 年)なども歴任して、日本工業標準調査会の JIS 作成委員としては、ディスクレコード、テストレコード、カセットテープ、カートリッジテープ、マイクロホン、技術用語(録音再生)、磁気録音再生システム、コンパクトディスク（CD）等の JIS 規格の作成にも携わった。

アナログレコード用ラッカー盤カッティング その 3

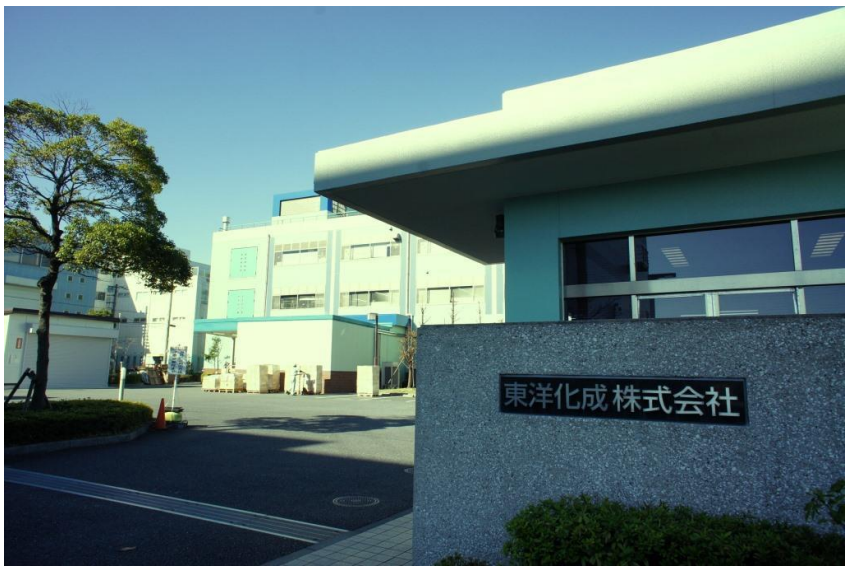
東洋化成

見たい聞きたい行きたいレポート　照井 和彦　JAS 事務局長

これまでにソニー・ミュージックスタジオ、ミキサーズラボ、日本コロムビア、そして JVC ケンウッド・クリエイティブメディアの状況について取り上げてきました。今回は、東洋化成のマシンとエンジニアへのインタヴューをお伝え致します。

東洋化成

ユニバーサル ミュージックが 2012 年に企画発売した 100% Pure LP シリーズの発売開始に合わせた東洋化成の工場見学に訪れて以来、何度かカッティングルームに伺っておりますが、取材での訪問は今回が初めてです。JR 鶴見駅で電車を乗り換えて不思議な建築構造を持つ国道駅の次、鶴見小野駅で下車し歩いて向かいました。

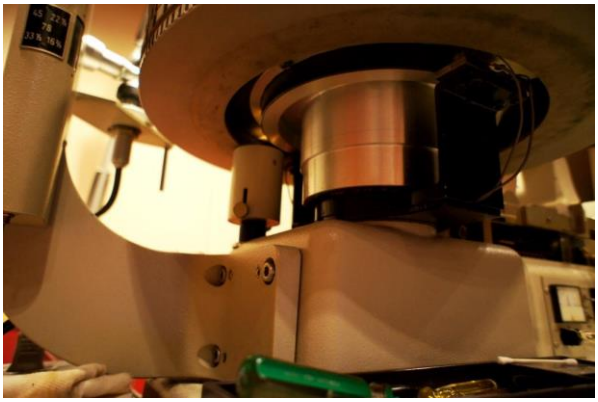


1959 年に創業した東洋化成は SP レコードの材料工場として日本コロムビアなど各社へ納入を開始します。そして早くも 1961 年には日本でも需要が拡大し世代交代しつつあった LP レコードの素材工場として塩化ビニールの供給と、併せてプレス機を導入し LP レコードの製造が始まりました。ビクター、カナリアレコードの工場も隣り合わせで並ぶ立地の中、東洋化成は印刷も手掛けます。そして 1966 年にはメッキ工場も操業を始め、さらに原盤のカッティングも受け入れられるようになり、現在の同社の事業全般が揃うことになります。70 年代に入ってからの LP レコードの需要増や、反対に CD の登場による急激なマーケット構造の変化など、その都度会社規模をたくみに調整しながら東洋化成は今日に至りました。

昭和の終わりとともに大手レコード会社がアナログ盤の製造を打ち切る中、日本唯一のレコード製造工場として音楽業界に貢献してきたことは、みなさんも良くご存じのことと思います。このところのアナログ盤ブームで、プレス生産枚数は大きく伸びているとお聞きしました。これは欧州のバンドが CD やデジタルファイル配信に替えてアナログ盤でリリースを始めたのがキッカケとも、90 年代のアナログ DJ 再燃現象とも言われているようです。

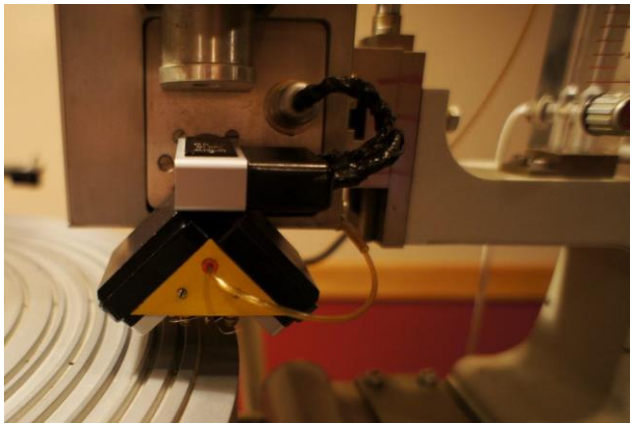
カッティングレース VMS70

（写真上）カッティングレース VMS70　ターンテーブル駆動は DENON 製モーター



（写真左）ターンテーブル天面　（写真右）ターンテーブル下部にモーター部が見える

ターンテーブルは日本コロムビアの VMS70 同様 DENON 製のダイレクトドライブ方式のモーターに変更されていました。



（写真左）カッティングヘッド SX74　（写真右）カッティングピッチ監視用のメーター

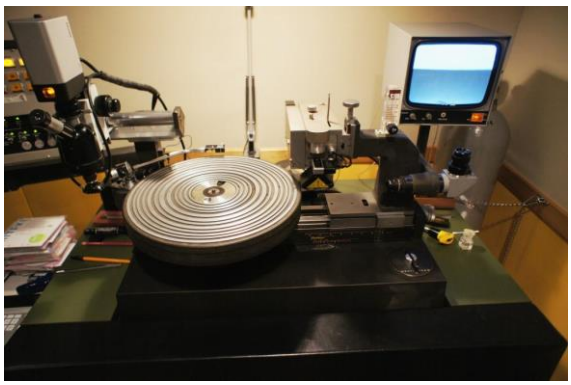
（写真左）テレフンケン製テープレコーダー　（写真右）ノイマン製コンソール本体

テープレコーダーには勿論先行ヘッドを備えており、コンソール本体と同色塗装なのが面白いところです。

（写真左）
Electronic Package SAL74

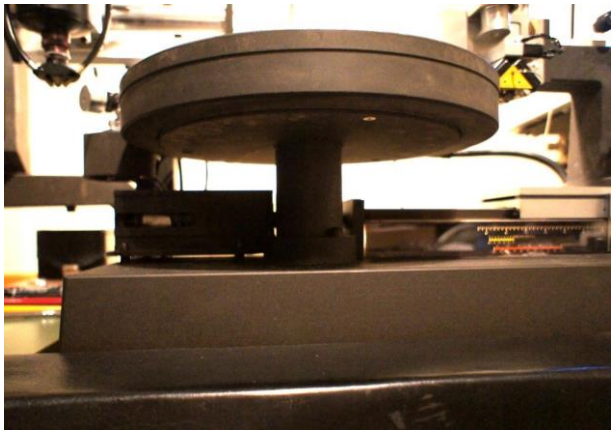
（写真右）デジタルマスター再生用に稼働するオーディオワークステーション

カッティングレース VMS80

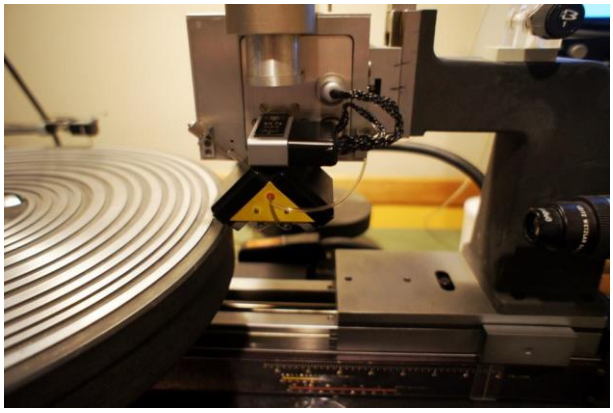


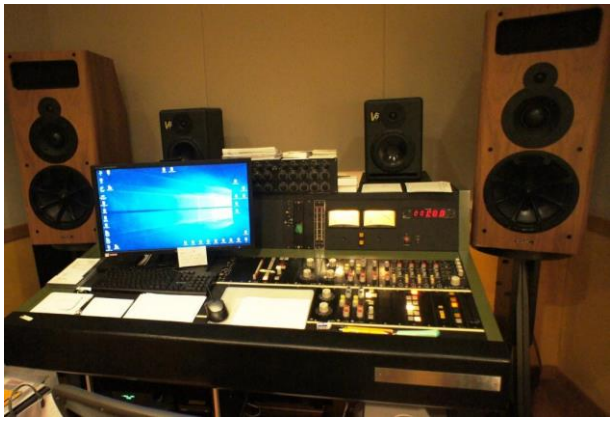
（写真最上）VMS80 本体　（写真左）VMS80 上部　（写真左）検聴用アーム

（写真左）操作盤を見る　（写真右）盤面検査用の顕微鏡



（写真左）ターンテーブルを横から見る　（写真右）モーターの底を下から覗く





（写真中左）カッティングヘッド SX74
（写真中右）ノイマン製コンソール本体
（写真下左）Electronic Package SAL74

写真でご紹介してきましたように、カッティングレースは VMS70 と VMS80 という NEUMANN（ノイマン）製の二世代のマシンが稼働し、二つあるカッティング作業専用の部屋に設置されており、それぞれにオペレーター（エンジニア）がいます。

カッティングエンジニア　手塚 和巳さん

カッティング一筋の手塚さんは 1969 年東洋化成に入社します。その頃の主力カッティングレースは VMS60 で駆動アンプも真空管式のパワーが 100 ワット以下、さらにカッティングヘッドも SX45 の時代というお話です。3～4 年の運用ですぐにレースが VMS70 になり、ヘッドも SX68 に替わりますが、組み合わせの Electronic Package（SAL 型番不明）が強すぎるのか、この SX68 はひ弱ですぐにコイル断線を起こしていた印象とのことです。しかしその後 SAL70 ヘッド SX74 の組み合わせになって故障も無くなり運用はとても安定していきました。この VMS70 と SX74、SAL74 は手塚さんが日々作業に用いているマシンです。

入社二年目のこと、当時のワーナー・パイオニアのエンジニア島さんがミックスした小柳ルミ子「わたしの城下町」のマスターテープが持ち込まれ聴いてみると、特に S 音が強く、高域での電気的リミッターが働いてしまう、と感じて EQ などを施すことを考えたそうですが、実際に

カッティングしてみるとそのままスンナリと通り、その頃の上司と二人で首をひねるほど大変不思議な体験をされたのだそうです。

手塚さんは、「LP 製作にはアナログテープマスターが向いていると考えておりクライアントにはお勧めしています。アナログテープならば 30Hz 以下の超低域の処理も自然で、また高音過多が起きにくく、その結果無理なカッティングを施す必要がないからです」と言います。CD 勃興の一時期不遇な時代もすごされたとのことですが、アナログへの愛情をとても感じさせて頂くコメントでした。

カッティングエンジニア　西谷 俊介さん

自分の楽曲を録音したテープからアナログ盤を制作し、その時手塚さんに施してもらってカッティング作業に興味を持ったという、レコード店員だった西谷さんは 2008 年の入社で、東洋化成では技術継承が行われているという暖かいお話です。メッキ、スタンパー製造や営業も経験して、今はカッティングレース VMS80 で作業を進めています。自身小学生の頃に聴いていた BOØWY の再発でアナログ盤カッティングを担当し、彼らの作品化に参加できたことが嬉しかったという西谷さんは「ここ数年のアナログブームは欧米が先行している印象で、また世代のリバイバル感もあると思います。若者の所有感の斬新さメディアレスへの逆行など、アナログが新しいモノとして映っているのではないでしょうか。LP レコードを聴いてもらうためには、基本的なことを一から説明していくことも必要だと思います」と言います。

またレコード会社から持ち込まれるマスターはデジタルが 9 割で、サウンドイメージも高域が伸びたキラキラしたものが多いそうで、収録時間の長いものも多くカッティングレベルを下げて対応するなど、対応苦慮することもあるようです。

（写真左から）カッティングエンジニア　西谷 俊介さん、
カッティングエンジニア　手塚 和巳さん、藤得 成さん

写真を見てお気づきと思いますが、藤得さんは今後のカッティングエンジニアとして 2014 年入社の修業中の若者で、現在プレスやメッキ、仕上げも経験している期待の星です。学生時代のアルバイトでそのまま東洋化成に居座る、典型的で正しくもあり美しいスタイルですね。

西谷さんからデトロイトで開催された making vinyl レコードサミットのお話を伺いました。世界中からアナログレコード制作製造にかかわるマネージメント、3rd プロダクション、カッティング関係者 200 名以上が集まり、LP レコードプレス機、特に現在稼働しているカッティングレースが古くなりつつある中で刷新が行われず、音楽に興味を持つ若い人たちが参入してきているが、解がない現状の問題共有が話題だったそうです。

熱心なコンファレンスの進行に「あの時アナログ LP 事業を止めないで良かった」と東洋化成のみなさんは強く思われたことと想像致します。

2012 年の工場見学会で手塚さんがお話された「ラッカーへの正確なカッティング作業によって LP レコード盤にはマスターテープの音は全部入っています。ただ、再生時にレコード盤からすべてを取り出せていないだけなのです。」の一言で、レコード再生の道にのめり込み始めてしまいました。オーディオの諸先輩方もご指摘されている通り、プレーヤーでの再生時にトーンアームとカートリッジ針で溝をなぞる機構と、カッティングレースのラッカー盤へのカッティング動作機構と、その大きな違いはどうやっても埋められないようです。正直ため息が出てきますが、その再生が難しいレコード盤から自分で考えている音が取り出せたときは、無上の喜びを感じますね。わたしの城下町を聴きながら、昭和アナログレコード全盛期に、思いをはせています。

オーディオ協会監修 音のリファレンスシリーズ

音源制作レポート

照井 和彦　JAS 事務局長

3 月 15 日有楽町東京国際フォーラムで OTOTEN2018 開催に向けて記者発表会を行い、そこで新規制作されたハイレゾ音源「音のリファレンスシリーズ」の活用についてご説明致しました。ハイレゾオーディオロゴは定義を満たしたオーディオ機器に冠するものとして 2014 年から運用を開始致しましたが「音のリファレンスシリーズ」はこれらハイレゾ対応機器の試聴に好適なハイレゾ音源として企画し、全 17 曲を新規に録音制作しました。

本レポートは録音制作が行われたビクタースタジオでの収録の様子、録音&サウンドプロデューサー高田 英男氏の音創りや再生チェックポイント（◇印のコメント）、各演奏アーティストの演奏への思い（〇印のコメント）、プロデューサーのコメントなどを一堂にまとめたもので、実際に頒布する音のリファレンスシリーズに付属されるリーフレットの内容を皆さまへ一足早くお披露目するものです。

録音

録音は渋谷区神宮前にあるビクタースタジオで 1 月 19・23 日に行われました。

◇ 音のリファレンスシリーズ録音制作への音質基準 ◇

リファレンス音源（基準となる音質）の定義を、各アーティストがスタジオで演奏している生音の音質感を忠実に録音する事とし、更に演奏から伝わる「音楽感動」を、音の魅力として表現する事をテーマとした。アーティストとの音に対するコミュニケーションを大切に、マイキング・マイクプリアンプにて基本的な音色を創るシンプルな録音アプローチである。

録音スタジオ：ビクタースタジオ 301、401

録音システム：192kHz/32bit ダイレクト 2 チェンネル録音　使用 DAW：Pro Tools HD

ドゥオール（藤井 隆史・白水 芳枝）ピアノデュオ

曲 1 ブラームス「ハンガリー舞曲 1 番」

曲 2 ブラームス「ハンガリー舞曲 5 番」

曲 3 サン・サーンス「動物の謝肉祭より 序曲とライオンの行進」

曲 4 サン・サーンス「動物の謝肉祭より 終曲」

◇ 録音機材 ◇

メインマイク

SCHOEPS CMC-521U

低音域マイク

NEUMANN M-149

低音域マイク

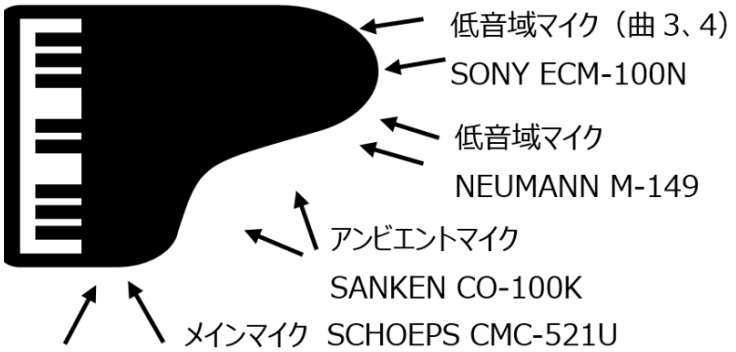
SONY ECM-100N

アンビエントマイク

SANKEN CO-100K

マイクプリアンプ

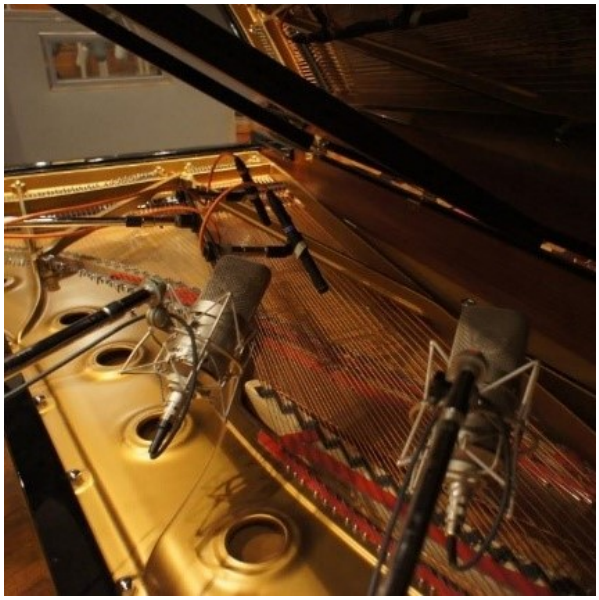
John Hardy M-1



◇ 音創り～再生チェックポイント ◇

演奏者ドゥオールからピアノサウンドについて、低音域の迫力・鋭い音の立ち上がり・一音一音のリアルな解像力とのアドバイス。

ショップスのメインマイクにてクリアーなピアノサウンドを創り、低音域の迫力にノイマン真空管式マイクとソニーハイレゾマイクを低音絃の近接にセットし、音のエッジが鋭く超低音域までクリアーなサウンド創りを進めた。更に、ピアノ全体の響きを三研ハイレゾマイクで調整する。特に動物の謝肉祭については、「裸の王様とライオン」とのキーワードをドゥオールから



頂き、超高域のクリアーサウンドを裸の王様・ライオンの迫力を超低域のイメージにて音創りを進めた。

極限までリアルなピアノサウンドを求めた録音であり、クリアーで立上りの鋭い音色・低音域のパワー感＆解像力が何処まで再生出来るかがポイント。

○　ピアノデュオ ドゥオール 藤井 隆史、白水 芳枝　○

これまで 6 枚の CD をリリースしてきましたが、今回のように私達の音楽だけのためではなく、素晴らしいマイクやスピーカーからの音を楽しみとされ、私達を聴いたことのない方々にも聴いて頂ける機会、ということで新鮮な気持ちで演奏しました。

選曲に関しては、「音域や強弱の幅が豊かで、デュオならではの音の積み重ねの世界が強調されるもの」とのリクエストと、私達が音に残したいと思った作品がピタリと重なり、録音のコンセプトもハッキリしていましたので、準備段階からレコーディング時まで、無理なく、解放された気持ちで臨めました。

レコーディングの間は、音楽に対して丁寧に、謙虚に、そしてしっかりと集中しました。そしてそれは当日私達を見守って下さったスタッフの皆様全員の空気感にも共通していて、一体となって音楽を創り出せたことに喜びを感じていました。

この音源からは、緊張感と共に躍動感、音楽の波動まで感じられます。

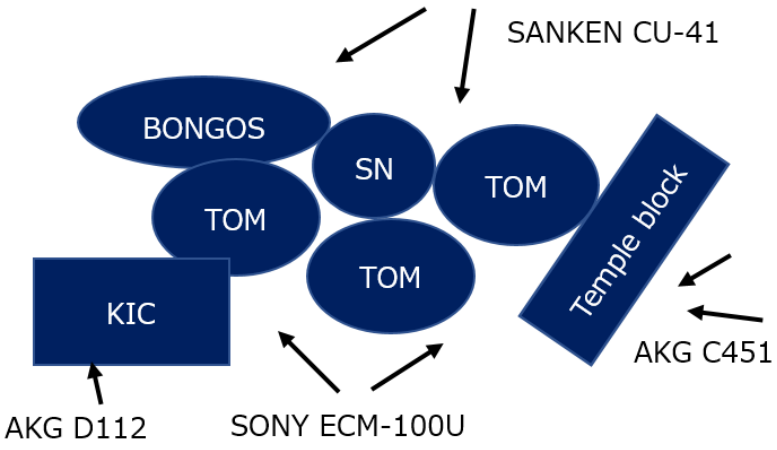
ピアノデュオに興味を持って下さるきっかけにもなると思います。素晴らしい音源が完成しましたこと、このご縁に感謝し、音楽と共にある人生を嬉しく思っています。

ドゥオール演奏収録中の様子

平子 ひさえ　マルチパーカッション

曲 5 カルス「4 つのインヴェンション 3 楽章」

◇ 録音機材 ◇
メインマイク
SANKEN CU-41
シンバル＆タム
SONY ECM-100U
ウッドブロック
AKG C451
キック
AKG D112
マイクプリアンプ
Neve 1073
コンプレッサー
TUBE-TECH LCA2B　Neve 33609



◇ 音創り～再生チェックポイント ◇

楽器としてはドラムセットがメインであり、ドラムブースにセットしマルチマイクの録音によりタイトでクリアーなサウンドを考えたが、クラシックパーカッション録音と捉え天井高が高いスタジオのメインエリアにて演奏して頂く。

打楽器独特の音響空間を生かした響き、打面への強弱による微妙な音のニュアンスなど、打楽器ならではの音の魅力を捉える事をポイントとした。

演奏者の後ろ側から耳の高さより少し高く、三研メインマイクをセットする。これは演奏者が感じている各楽器の音色や音量バランスを、一番素直に録音出来るマイキングの一つで大変シンプルなマイキング方法である。

シンバル・タムにはクリアーで高音域まで伸びているソニーハイレゾマイクを使用、キックのオンマイクにはダイナミックマイクを使用し、強いアタックを作り、メインマイクのバスドラの低域の響きを上手くミックスする。

マイクプリアンプには音のエッジが鋭く中高域の解像力が高いヴィンテージ機材 NEVE-1073 を音創りの核として使用する。スティックの打面位置で変わるシンバルの音色変化・スネアドラムの強弱における音色感・キック＆タムのアタック感など、素直で解像力の高いクラシックパーカッションのサウンドである。

周波数帯域バランス・基本的な音色感・アタック感の表現など、再生チェックポイントである。

Neve 1073 と使用したイコライザー

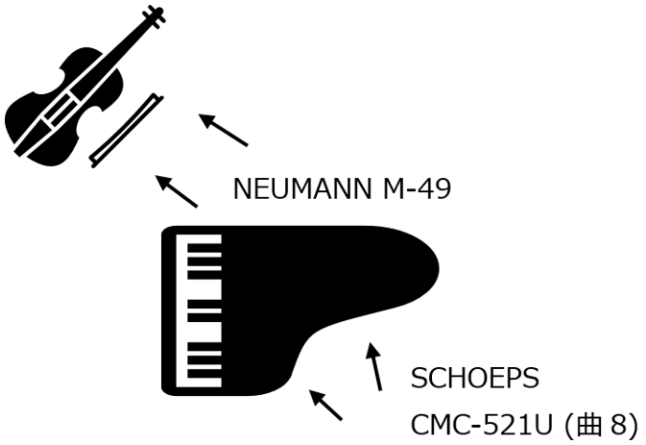
○　マルチパーカッション　平子 ひさえ　○

1974 年に出版された M.カルス作曲の 4 つのインヴェンションは、全 4 楽章から成る打楽器ソロの名曲ですが、2,4 楽章にのみ伴奏がついており、1,3 楽章は伴奏無しという珍しいスタイルの作品です。国際コンクールなどの課題曲や試験などで取り上げられることも多い作品ですが、今回は多彩な音色を表現できる 3 楽章のバッテリー(マルチパーカッション)部分を演奏させていただきました。サスペンダーシンバルの P で刻む軽快なリズムから始まり、ボンゴ、トムトム、スネアドラム、バスドラム、というピッチの高低差を効かせた膜質打楽器、そしてカウベル、ウッドブロック、テンプルブロックという異質な音色の小物楽器が加わり、幅広く多彩な音色を一度に表現できる作品ですが、その音色の違いを瞬時に出すのがとても難しい。乾いた高音のボンゴから、深く力強い低音のトムの音色を出すには、それぞれを叩く瞬間のスピードや手首や腕のコントロール、そして演奏中の響きやバランスを総合し瞬時に使い分けながら鳴らしていきます。トムトム部分では、2:3, 3:4, 4:5, 4:6, 5:6 という左右の異なるリズムの組み合わせがとても面白く、私自身が"素"になれる部分でもあります。中間部のスネアドラム、そして終盤に差し掛かる前の小物楽器とトムを交えた箇所では、高い集中力と技術が求められる部分で、まさに奏者の聴かせどころ、踏ん張りどころともいえるでしょう。高音質でのレコーディングということで、私もいつも以上に集中力を保ち、頭と体力のバランスを取りながら臨ませていただきました。リラックスできる雰囲気を作ってくださったスタッフの皆様にとても感謝しています。多種多様な効果が詰まったこの作品を、素晴らしい最新の音響効果でさらに広がる打楽器の世界をぜひ楽しんでいただけたらと思います。

福崎 雄也　ヴァイオリン

曲 6　バッハ「無伴奏パルティータ 3 番　プレリュード」
曲 7　バッハ「無伴奏ソナタ 1 番　フーガ」
曲 8　クライスラー「愛の喜び」ピアノ：にと まいこ

◇ 録音機材 ◇
ヴァイオリン・メインマイク
NEUMANN M-49
ピアノ・メインマイク
SCHOEPS CMC-521U (曲 8)
マイクプリアンプ
SSL9000J



◇ 音創り～再生チェックポイント ◇

ヴァイオリンの音色については演奏者が耳の傍で体感している音色と、客席などホール音響空間を通して伝わる音色とは大きく違い、大変難しいテーマである。

今回の録音では演奏者が体感しているリアルな音色表現を目指す事とした。録音はビクタースタジオ 401 であり、メインエリア独特の響きを生かした録音である。

クラシック録音の定番である最新マイクをトライするが、直接音が鋭く入り過ぎ上手く表現が出来なかった。悩んだ末にヴィンテージマイク・ノイマン M-49（真空管式）をステレオにセットし、ハイブームスタンドで演奏者との距離を追込みながら音創りを進めた。福崎さんからは絃の響きと併せて、楽器本体から伝わる中低域の音色､更にスタジオ独特の低域の響きの調整など､細部に亘るアドバイスを頂く。

曲 8 愛の喜びではヴァイオリンに音のフォーカスを合わせ、ピアノは少しバックでヴァイオリンを包み込む音色・バランスとした。

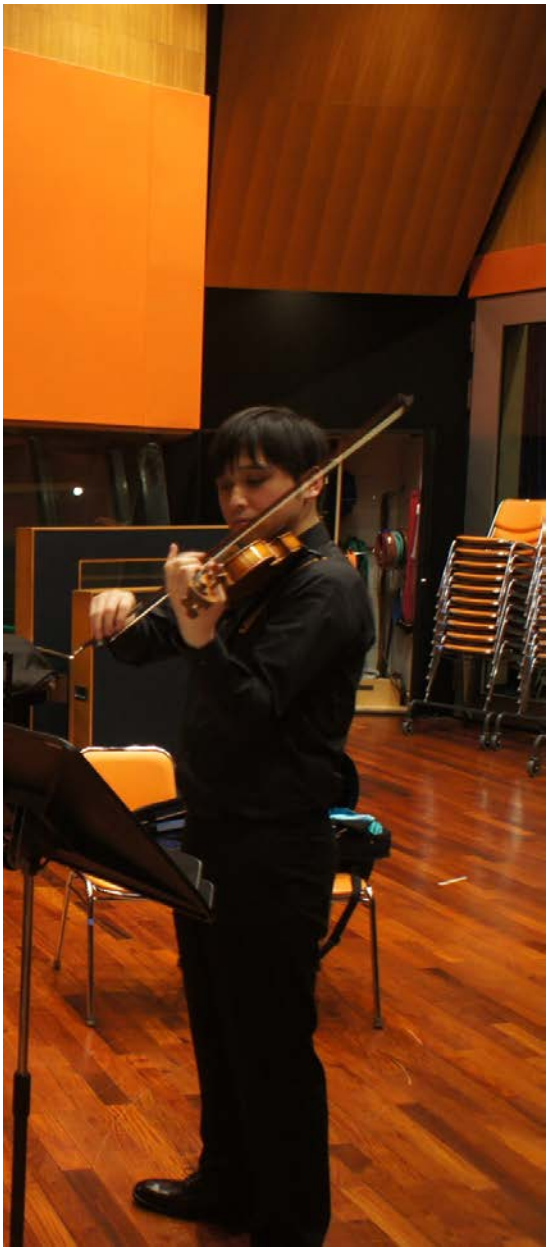
開放的で高域まで素直に伸びた音色、繊細な絃の響きとボディーから伝わる中低域の質感が再生のポイント。

○　ヴァイオリン　福崎 雄也　○

バッハ「無伴奏ヴァイオリンソナタ第 1 番からフーガ」について

バッハは鍵盤奏者として有名であったのですが、実はヴァイオリンも相当な腕前だったそうです。その技術の結晶とも言えるのが、バッハの無伴奏ヴァイオリンのための 3 つのソナタと 3 つのパルティータだと思います。

この曲は、整然さ・厳格さ・重厚さというのを感じさせます。それは単純な 1 つのメロディを淡々と重ねていくフーガという形式もあると思いますが、いろいろな高さで出て来るメロディの高音弦の緊張感のある音や低い弦の深み、そして何よりも重々しく響きわたる和音が数多くあるからでしょう。それ故に音楽自体が重く、流れが止まってしまわない様に意識して演奏しています。



また今回の録音では、ヴァイオリンという楽器が弦の上を弓で「滑って」弾いているのではなく、「擦って」弾いているのだというのがよく伝わってきます。

また、修正無しの一発勝負であったので緊張感、演奏会本番さながらの迫力も楽しんでいただきたいです。

バッハ「無伴奏ヴァイオリンパルティータ第 3 番からプレリュード」について

この曲はキラキラして軽やか且つ、いろんな表情を魅せる風のようなイメージがあります。「無伴奏ヴァイオリンソナタ第 1 番　フーガ」とは対極の作品とも言えると思います。

バッハの時代はロマン派以降の時代と違って強弱記号や表現記号というのは最小限にしかありませんでした。ですから、この曲を楽譜の通りに演奏すると f（強く）と p（弱く）という二つの表情しかないことになってしまいます。

それをバッハが求めていたというわけではもちろんなく、演奏家のセンスなどに任せていた部分が大きいのでしょう。

今回は、フレーズや音楽の緊張度など細かい部分の音色や強弱を、自分なりに付加して演奏しています。普通の録音ではフラットに聴こえてしまう部分も今回の素晴らしい録音で捉えられたわずかな音色の変化や強弱、風の様な音楽の中のうねりも聴いていただければと思います。

クライスラー「愛の喜び」について

この曲はヴァイオリンの曲の中でも大変有名で、聴いていてとても楽しくなる曲です。今回の録音に関しては、演奏家がいつも悩むところである、作曲者の想い、またどのように弾いて欲しかったのかという意図を、名曲だからこそ、より一層考えました。

実は、作曲者自身の録音が残っている曲でもあります。

作曲家自身の録音があると、その意図を探る上では有難いことではあるのですが、真似をしただけではただの劣化コピーになってしまいます。

僕自身のこの曲へのイメージは、ウィーンの美しく煌びやかな町並みなどから感じる爽やか愛です。ある部分では少し若い二人がふざけ合う様な部分を、ピアノとの掛け合いで表現したり、またあるところは子守歌の様に母親を思わせる深い愛の部分があったりと、短い曲の中に様々な愛が感じられる作品です。

ヴァイオリンの和音の残響や、二人で演奏している空気感、そして弾いている弦それぞれの音色の違いまで感じられる今回の録音はとても演奏家にとっても嬉しいものとなりました。最後になりましたが、今回の録音に関わってくださった全ての皆様に感謝申し上げます。

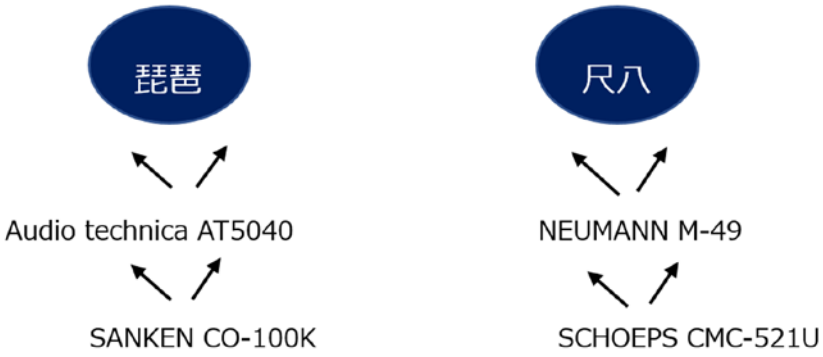
クライスラー「愛の喜び」録音演奏中の様子

熊田 かほり　琵琶　松本 宏平　尺八

曲 9　熊田 かほり「Birth of Legend」

◇ 録音機材 ◇

琵琶メインマイク
Audio technica AT5040
琵琶アンビエントマイク
SANKEN CO-100K
尺八メインマイク
NEUMANN M-49
尺八アンビエントマイク
SCHOEPS CMC-521U
琵琶マイクプリアンプ
SSL 9000J
尺八マイクプリアンプ
John Hardy M-1



◇ 音創り～再生チェックポイント ◇

琵琶と尺八の競演による録音である。琵琶を録音する機会が無く初めての録音であり、熊田さんに演奏をして頂き、琵琶の多彩な音色の変化を教えて頂き録音に入っていった。絹糸による絃の響きから伝わる圧倒的な音表情に驚き、更にバチで楽器本体の胴を叩いて出す打楽器的な音色と極端な音量変化、録音する側としては究極に難しい録音である。Birth of Legend 楽曲は琵琶と尺八によるコラボ演奏にて音楽ストーリーを表現しており、楽曲の中での繊細な楽器バランスが求められた。

琵琶独特の多彩な音色と鋭いアタック感、尺八の静と動による音色変化など何処までリアルに再生出来るかがポイント。

○　琵琶　熊田 かほり　○

琵琶の世界観において不可欠な「無常」、「鎮魂」という二つの概念をテーマに、祈りと再生を表現した曲です。何度も廻っては人間を苦しめる業と、それにあらがう人間の哀しさを、ぶつかりあう琵琶と尺八の生々しい音色から感じ取っていただければ幸いです。 この曲は、2008 年の初演から松本 宏平氏とのデュオで公演回数を重ねてきましたが、 作曲から約 10 年の時を経て、このたび音源化して頂けたことをとても嬉しく思います。

琵琶という楽器は、絹糸で弦が張られており、その扱いは大変繊細で神経を使うところでもあります。絹糸なので糸のへたりも早く、調弦が難しい楽器でもあります。今回は琵琶の様々な音色を楽しんでいただけるような糸の擦れや、バチの当たる音など、様々な音の魅力を余すところなく録音していただきました。

なお今回の収録には、完成から 100 年以上を経たヴィンテージ総桑の琵琶を使用しています。何世代にもわたって、演奏家たちが大切に引き継いできた古き良き音色を、現代でも味わうことのできる音に仕上がっています。

尺八：松本 宏平　使用尺八 小林 一城作 二尺一寸管

松本 宏平　尺八

曲 10　古典本懐「山谷」ダイジェスト
曲 11　古典本懐「雲井獅子」ダイジェスト

◇ 録音機材 ◇

メインマイク	NEUMANN　M-49
アンビエントマイク	SCHOEPS CMC-521U
マイクプリアンプ	John Hardy　M-1

◇ 音創り～再生チェックポイント ◇

尺八独特の音色表現は勿論であるが、演奏者の「気」、音になる前の微妙なブレス感や、呼吸の間など音の無い世界における緊張感が何処まで音として表現出来るかが録音のテーマである。ノイマン M-49 のステレオマイキングにより自然な音色で尺八が持つ基本的な音表情を捉え、ショップス CMC-521 で倍音成分から伝わるブレス感、音の緊張感を表現した。

尺八の静寂感の魅力を音にした録音であり尺八毎の音色の変化や演奏者の思い「気」が音として何処まで伝わるかが再生ポイントである。

○　尺八　松本 宏平　○

琵琶とのアンサンブルに加えて、尺八の古典曲「山谷」「雲井獅子」から抜粋した短いピースを収録させて頂きました。尺八は使用管や音域、指法、息の使い方によって著しく音色・音質が異なることが大きな特徴で、これらを緻密に組み合わせることでたった一本の尺八で色彩感や立体感を表現していきます。この音色のコントラストこそが尺八の美味しい「聴きどころ」なのですが、録音技術者にとってはむしろ「泣かせどころ」なのかもしれません。今回は山谷の抑制された中に強い意思を持った低音、雲井獅子のゆったりと舞うような軽やかな高音を余すところなく、また自然な生の空気感を残したまま録音して頂くことができました。この場を借りてスタッフの皆様に御礼を申し上げたいと思います。

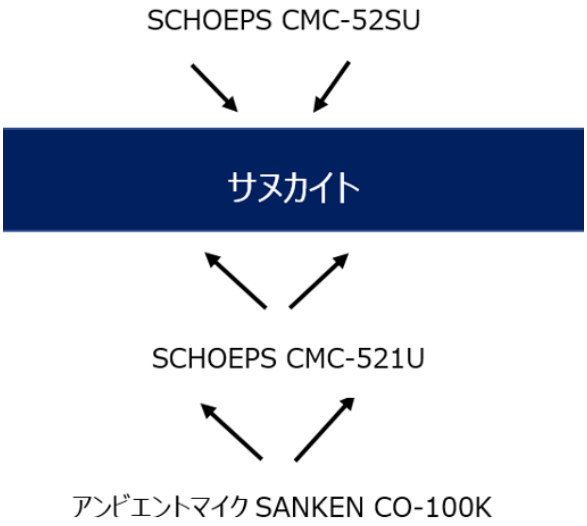
使用尺八

「山谷」 横山 勝也作 二尺四寸管　　「雲井獅子」 三浦 龍畝作 一尺八寸管

尺八はそれぞれ音域が違います。合奏の時はキーを合わせるため、それに適した楽器を選択します。古典の独奏曲には指定はありませんが、曲の雰囲気に合ったものを選びます。私の所属する流派では雲井獅子は短い竹で高音をくっきり、山谷は長い竹で低音を聞かせる、というのがセオリーです。

小松 玲子　サヌカイト

曲 12　小松 玲子「秘かな水瓶」
曲 13　小松 玲子「LOVE LETTER」



◇ 録音機材 ◇
メインマイク
SCHOEPS CMC-521U
メインマイク
SCHOEPS CMC-52SU
アンビエントマイク
SANKEN CO-100K
マイクプリアンプ
SSL 9000J

◇ 音創り～再生チェックポイント ◇

サヌカイト楽器そのものの存在を全く知らない状況で録音する事になり、事前に録音打合せの時に小松さんにお会いし、楽器について教えて頂いた。

スタジオで聴くサヌカイトは神秘的であり、スタジオ音響空間に立体的な響きを創り出す不思議な音色の楽器であった。柔らかめなマレットでサヌカイトを叩くと、オルゴール的の響きと、自然石が持つ独特の音色が重なり合い、色彩感豊かな響きとなるのである。演奏者側から感じる響きと楽器正面の響き・音色は異なっており不思議な倍音に心地よく包まれる感じである。マイキングは無指向性のショップスマイクを演奏者の後方から、楽器正面には同じくショップスの単一指向性マイクで、全体の響きを三研ハイレゾマイクにて録音。神秘的で大変美しいサヌカイトのサウンド創りを目指した。スタジオの S/N を良くする為に、録音時にはスタジオの空調を止め、出来るだけ静寂感の環境を作り演奏をお願いした。

柔らかく透明感がある神秘的なサヌカイトの響き、リアルで硬質なベルツリーの音色など何処まで再生出来るかがポイント。

サヌカイト（日本文化いろは事典より）

香川県瀬戸内地方に産出する自然石、1891 年ドイツの地質学者ヴァインシェンクが「讃岐の岩」の意をこめ、サヌカイトと命名。木槌で叩くと神秘的で澄んで美しい音が奏でられる。

○　サヌカイト　小松 玲子　○

「秘かな水瓶」について

サヌカイトは、1300 万年前の自然石からできた楽器です。音色は水のようにしっとりとしています。「秘かな水瓶」は、まるで静かな深海にいるような気分で、水瓶座の私は孤独を楽しみ、秘密を楽しむ。独り言を言ってるような、内側に向いた曲です。石なので固い響きになりがちなのですが、高田さんのお陰でしっとりとした響きの音源になりました。冒頭部分はサヌカイトにそっと触れているだけでしたが、私が普段演奏しながら聴いている音そのままに収録してくださり、感激致しました。

「LOVE LETTER」について

SNS で気持ちを伝えるスピードの早い時代。好きな人を想いつつ、便箋選びから時間をかける人はもう少ないでしょう。返事が来るのか来ないのか、何度も書き直した LOVE LETTER は、直接的でとても強い行動だと思います。ストレートな気持ちを音にしたためて。サヌカイトの演奏で実感するのは、演奏者と聴く側の意識の違いです。強い思いで演奏する私と、淡い思いで受け取りたいお客様。とても面白い現象だと思います。

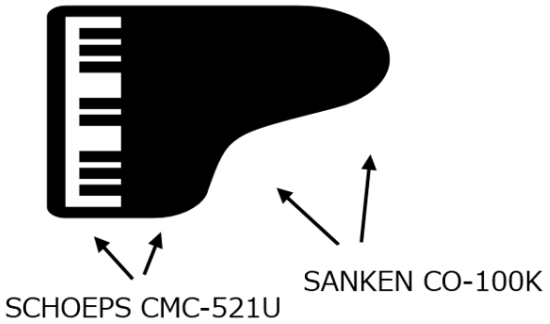
「秘かな水瓶」はピアニシモの柔らかい響きを特徴としますが、この曲はストレートで輪郭のはっきりした曲です。石のアタック音さえも一つの音色として聴いていただきたいです。

サヌカイトの録音の様子。様々なマイクロホンアレンジを試みて最終的な組み合わせを決めました。

にと まいこ　ピアノソロ

曲 14　ドビッシー「月の光」
曲 15　ショパン「エオリアンハープ」

◇ 録音機材 ◇
メインマイク
SANKEN CO-100K
補助マイク
SCHOEPS CMC-521U
マイクプリアンプ
John Hardy M-1



◇ 音創り～再生チェックポイント ◇

美しいピアノソロ演奏である。本来であれば美しく響くホールでの演奏が BEST であるが、録音スタジオでの演奏である為、演奏者の繊細な音表情をリアルに伝える方向での音創りとした。柔らかく繊細な演奏を素直に表現する為には、マルチマイク録音でのトライは難しく、試行錯誤の結果ワンポイント録音でのアプローチとした。100kHz まで録音出来る三研のハイレゾマイクをステレオバーにセットし、全帯域を素直に録音、更にショップスマイクが持つ高域の伸びを少しミックスし、繊細な演奏による強弱での音色変化、柔らかく伸びのある低音域など音表情の変化を音にするアプローチとした。

ワンポイント録音による自然で素直なピアノサウンドが何処まで表現出来るかがポイント。

センターSANKEN CO-100K　　L 側 SCHOEPS CMC-521U

○　ピアノ　にと まいこ　○

ショパン「エオリアンハープ」について

今回の 1 曲目の収録曲でした。ピアノへ向かうとなんともソフトなスタインウェイ。どこまで自分の要求に応えてくれるのか…。しかし、ピアノの方も試されているとわかるのか、初めはなかなか心が通い合いませんでした。

スタジオの音響はホールでの響きと異なります。どの位置に耳を置いて演奏すれば良いのかが、掴めずに手探りの時間を経て、試し録り。

録音を聴いてみると、ここまで繊細にキャッチされているとは、と驚かずには入られませんでした。

それを聴いてからは、私はとにかくやりたいことを丁寧に、ショパンがこの曲に託した感情を表現すれば良いだけなんだ、と意識を変えました。

高田さんの数回マイクのチェンジを経て、さらに驚くほど理想的な音色バランスに変化しました。

本番収録は、ショパンと親密になれたような幸せな時間でした。

時にため息交じりに、時に熱い口調で語るショパン。しかしその瞬間は刹那的。

あんなにも熱く愛に溢れていた時間が、風のように姿かたちを消してしまい、

残るのは温かな余韻だけ・・・そんな表現をお楽しみいただけたら嬉しいです。

ドビュッシー「月の光」について

ピアノとの距離も縮まった 2 曲目の収録でした。1 曲目の音数の多さとは対極にあるようなこの曲。

たったひとつの音のバランスが全体の流れを変えてしまう。そんな恐怖心があり、途中何度か録り直しもお願いしてしまいました。

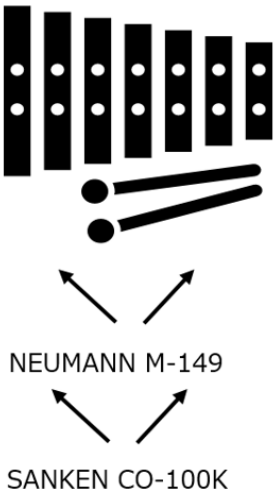
途中休憩の間、私を和ませようとしてくださってるスタッフ皆さんに気がつきました。他愛のない会話をした十分ほどだったと思うのですが、非常にリラックスをさせて頂き、力が抜けたのを覚えています。

作品はそのままの姿で美しいく、演奏者である私は、何も加えず何も引かず・・・

ドビュッシーの世界観に浸ること。音にはなっていない「空間の立体感」も感じ取って頂けたら、嬉しいです。素晴らしいスタッフの皆様と、素晴らしい音源ができましたこと、感謝しています。

平子 ひさえ　マリンバ

曲 16　バッハ「無伴奏チェロ組曲　プレリュード」
曲 17　バッハ「無伴奏チェロ組曲　メヌエット」

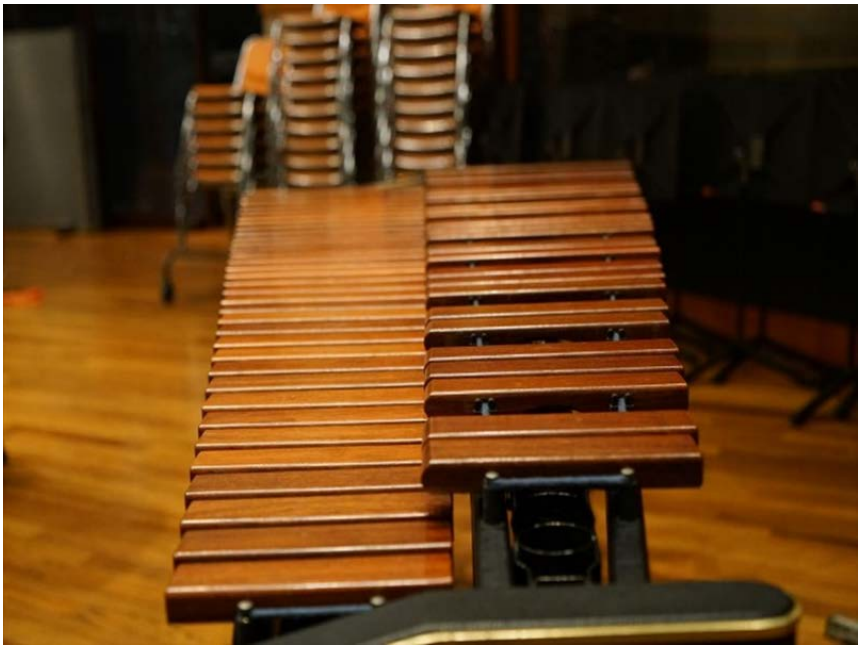


◇ 録音機材 ◇
メインマイク
NEUMANN M-149
アンビエントマイク
SANKEN CO-100K
マイクプリアンプ
SSL 9000J

◇ 音創り～再生チェックポイント ◇

平子さんから柔らかい響きの中に深みのあるマリンバサウンドをとのアドバイスを頂く。音の抜けが良く高音域まで伸びるコンデンサーマイクでチャレンジしたが、低域の深みの表現が難しく、最終的にはノイマン真空管式マイクを少し近接にセットし、全体の響きを三研ハイレゾマイクでバランスを調整した。スタジオ録音の為、デジタルリバーブにて余韻感を補強し、平子さんがイメージされたマリンバサウンドを録音した。平子さん演奏の柔らかく深みのある音色感、残響時間の長いホール的な響きの美しさが何処まで再生出来るかがポイント。

○　マリンバ　平子 ひさえ　○



マリンバでは、J.S.バッハの無伴奏チェロ組曲よりプレリュードとメヌエットを演奏させていただきました。とても有名なこの作品はチェロのために書かれたものですが、今ではいろんな楽器で演奏されており、今回はマリンバの音色の良さをシンプルに伝えられたらと思い、この曲に臨みました。コンサートホールで弾いているような音の響きをそのまま再現してくださったことに感激です。マリンバの柔らかくあたたかい音色の中にも深さや力強さなど、音色の幅広さを曲の中に感じていただけたら幸いです。

2013 年から本格的に市場開発が始まったハイレゾリューション･オーディオ（以下、ハイレゾ）は、ホーム用途からポータブル用途まで幅広いオーディオ商品が発売されてきました。

2015 年にはハイレゾ対応スマートフォンの台頭と、それら環境を支援する各種配信サービスが普及し、2017 年のコンテンツ市場は数量前年比 43%増、金額前年比 16%増と成長し続けいています。（GFK データ）音楽ジャンルも邦楽、洋楽、アニメ、ゲームなど様々なコンテンツが発売され、より幅広い顧客層へ拡大しています。

しかし、ハイレゾ音源として発売されているものの中には、16bit 音源を信号処理でハイレゾ化したものや、アナログからのリマスタリング段階で音質加工したもの、また、レコーディングマイクの帯域制限から、きめ細かい音質と幅広い音域を収録出来なかったものなどが混在しており、収録から完成までハイレゾ規格に準拠し制作されたものはまだ少ないのが現状です。

今回の「音のリファレンスシリーズ」では、アーティストが伝えたい音や表現を余すところなく再現するため、収録機材を厳選すると同時に、アーティストと共に音質、音楽表現の双方に満足いくマイクセッティングを慎重に行い、制作過程での信号処理を極力排することで、緻密で臨場感ある高品位な音源となるよう制作しました。またアーティストの方には、編集をしない前提での演奏を要請し、音楽性を損なわないよう留意しました。

圧縮音源をストリーミングで聴くスタイルが広く普及する一方、データ容量の大きなハイレゾ音源も、技術の進化や情報インフラ整備を受け多面的な普及が始まりつつあります。

こうした中、今回の音源が幅広いお客様に対し、より高品位なオーディオ体験を提供すると同時に、評価音源としてご活用いただければ幸いです。

「音のリファレンスシリーズ」プロデューサー　竹村 昌樹
ソニービデオ＆サウンドプロダクツ株式会社
チーフ・ビジネスディベロップメント・ストラテジスト
（エニーミュージック株式会社 代表取締役社長）

◇ 音のリファレンス音源を録音して ◇

録音制作で常に感じる事は、「音の世界」はそれぞれの感性の世界であり何を持ってリファレンスとするのかは、大変難しい事である。録音エンジニアとして心掛けている事は、アーティストの思いを如何に音として表現し、更に録音技術（エンジニア感性）により、少しでもそれぞれの音楽の世界を広げられたら素晴らしいと思っている。ハイレゾ録音により音楽制作が日常化している今、音質的魅力の最大ポイントは可聴帯域での音質改善であると感じている。

ハイレゾフォーマットにより可聴帯域内の物理的特性が改善される事で、音色感・歪感が大きく改善され、更に超高域まで再生特性が伸び、分解能の深さが増す相乗効果により、ハイレゾフォーマットの魅力が音として表現出来るのである。

ダイレクト 2 チャンネル録音ならではの音の鮮度に拘り、マスタリングなど何もしないダイレクト録音そのままの音源である。

是非、リファレンス音源をハイレゾ再生機器は勿論、それ以外の民生機の音質チェックの音源として活用して頂けましたら幸いである。

録音&サウンドプロデューサー　高田 英男

本企画のオファーを頂いた際に思い描いたのは、お聴きくださる方が高音質に意識を向けながらも、ふと気がつけばその音楽そのものに聞き入ってしまう姿でした。音質と音楽の両立。そのためにまず「対比」というテーマを設定しました。

ピアノはソロだけでなく、一台二人で弾くデュオの演奏も入れ、ダイナミックレンジの違いなどにも耳を傾けていただけるよう考えました。また同じ弦楽器でもヴァイオリンと琵琶の弦の素材違いや、石の楽器であるサヌカイトと木のマリンバ、複数の打楽器を一曲で使用するなど、随所に対比できるものを配置しています。

もうひとつのテーマは「調和」です。デュオのハーモニー、ヴァイオリンとピアノの音の重なり、尺八と琵琶の演者の呼吸など、音楽の中で生まれる調和された空気感をも、高音質な録音でお楽しみいただけます。

各演奏者は選曲の段階から参加し、企画に沿った楽曲を提案くださいました。さらに録音へのアプローチはエンジニアの高田さんと、音楽との相関をプロデューサーの竹村さんと相談するなど、作品作りに深く関わり、「音のリファレンスシリーズ」は、演奏者の伝えたい音楽の世界がそのまま捉えられた稀有な作品となりました。

この音楽データがお聞きくださる方のそばで空気を震わせる時、今まで体験したことのないような、新しい音の「基準」になれば幸いです。そして同時に、この音楽に浸る時間そのものが、皆様にとって幸せなものになることを願っています。

キャスティングプロデューサー・企画構成　渋谷 ゆう子

株式会社ノモス　代表取締役

音のリファレンスシリーズはこのレポートにありますように、オーディオを楽しむための音楽作品として制作されています。また、演奏アーティストの皆さんにも、彼等の通常制作アルバムとはコンセプトや録音手法が違うことを説明し、USB での配布方法をとることなど、十分な理解を得ることで録音が実現しました。192kHz32bit PCM で制作が進められ、ハイレゾ音源として完成を目指しましたので、お手元に届けるために、現在 USB への落とし込み(製造)を行っているところです。

ⓒⓅ2018 NOMOS

すでにアナウンスしておりますように、6 月開催予定の OTOTEN2018 の会場では、学生の皆さまへの来場記念として毎日 100 名の方に USB をプレゼント致します。一般来場の皆さまには OTOTEN2018 初日開始として USB を原価でお分けできるよう算段中で、準備が整い次第順次 web に情報をアップしていきますので、どうぞお楽しみに！（JAS）

音のリファレンスシリーズ ～スタッフ～
プロデューサー：竹村 昌樹（エニーミュージック株式会社 代表取締役社長）
録音&サウンドプロデューサー：高田 英男（株式会社ミキサーズラボ）
アシスタントエンジニア：川人 俊之　斎田 崇（ビクタースタジオ）
キャスティングプロデューサー・企画構成　渋谷 ゆう子（株式会社ノモス 代表取締役）

JAS Information

平成 29 年度第 4 回（2 月度）、第 5 回（3 月度）

理事会報告・運営会議報告

第 4 回理事会 議事

2 月 7 日に平成 29 年度第 4 回理事会・運営会議が理事 12 名監事 1 名の出席のもと開催されました。

1. 第 1 号議案：新会員の承認を求める件
個人 4 名の入会申請が報告され、原案通り承認されました。

2. 第 2 号議案：役員推薦委員会に関する報告
役員推薦委員会･組織財政検討合同会議（委員長：斎藤重正氏）を代表して役員推薦委員会委員の相澤宏紀氏から次期役員体制と役員候補者について引き続き調整中の現況報告がなされました。

3. 第 3 号議案：展示会計画骨子の承認を求める件
展示会計画が説明され、予算の進捗、物流業者、オープニングセレモニー内容、懇親会について全て承認されました。

第 4 回運営会議 議事

・平成 29 年度収支見込み（H30. 1 月時点見込み）
資料をもとに予算進捗が説明されました。
・平成 30 年度事業計画策定にあたっての確認
・ハイレゾロゴ動向報告
･「ハイレゾリファレンス音源」「井筒香奈江 album」の二つの音源制作状況が紹介されました。

第 5 回理事会 議事

3 月 14 日に平成 29 年度第 5 回理事会・運営会議が理事 13 名監事 1 名の出席のもと開催されました。

1. 第 1 号議案：新会員の承認を求める件
株式会社インターアクション、および、個人 2 名の入会申請が報告され、原案通り承認されました。

2. 第 2 号議案：定款変更の承認を求める件
理事数の変更等の変更案が説明され、一部について引き続き調査検討し平成 30 年度第 1 回理事会で審議することが確認された以外、全て承認されました。

第 5 回運営会議 議事

・平成 30 年度役員候補が説明されました。
平成 30 年度総会は役員改選が行われます。総会に向けての要点と日程が併せて確認されました。
・平成 30 年度事業計画案が説明されました。
･展示会について今後の日程進捗が確認されました。
・ハイレゾロゴ動向報告
2 月末現在 155 社、1552 モデルのハイレゾ申請を受け付けております。